第５章　赤穂を代表する歴史文化

ＪＲ播州赤穂駅前の大石内蔵助像

1　赤穂を代表する歴史文化の設定

第 4 章では、各地域に根差した歴史文化、そして地域を越えた歴史文化の視点をつぶさに捉えることができた。本章ではこれらを踏まえ、赤穂市を代表する歴史文化を提示する。

これまでの歴史文化の設定は、各地域を特定の視点で把握することによって物語ることができた。これを総合するためには、各テーマをさらに広い視点でまとめあげる必要がある。そこで、歴史文化の視点 36 テーマを過不足なくまとめあげる設定を検討した結果、下記のとおり 6 つの視点で設定することが適切と考えられた。

赤穂市は、千種川や瀬戸内海などに育まれた豊かな自然のなかで、特色のあるまちなみが形成され、塩づくりの国として栄えた。そして山、川、海をもつ豊かな自然景観を背景として、様々な立地、内容をもつ古墳や、播磨に多い獅子舞だけでなく、船祭等の特色のある祭礼が際立つ。さらに、赤穂を全国に知らしめた赤穂事件、忠臣蔵という歴史文化も欠かすことができない特徴である。以下、各歴史文化の概要を紹介する。

図 30　　赤穂を代表する歴史文化のダイアグラム

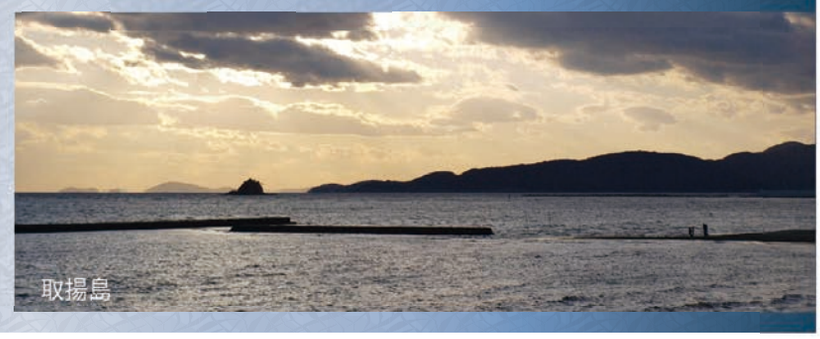
千種川と瀬戸内海
―豊かな自然にはぐくまれた文化―

瀬戸内海

清流千種川

赤穂市街地と千種川

御崎の桜



取揚島

坂越の船祭

■ストーリー

赤穂は、清流千種川が瀬戸内海に注ぎ込む河口部のまち。千種川は、土砂を河口部に堆積させて文字通り赤穂の土地を創り出し育んだ一方、洪水によって赤穂の景観を一変させることもありました。

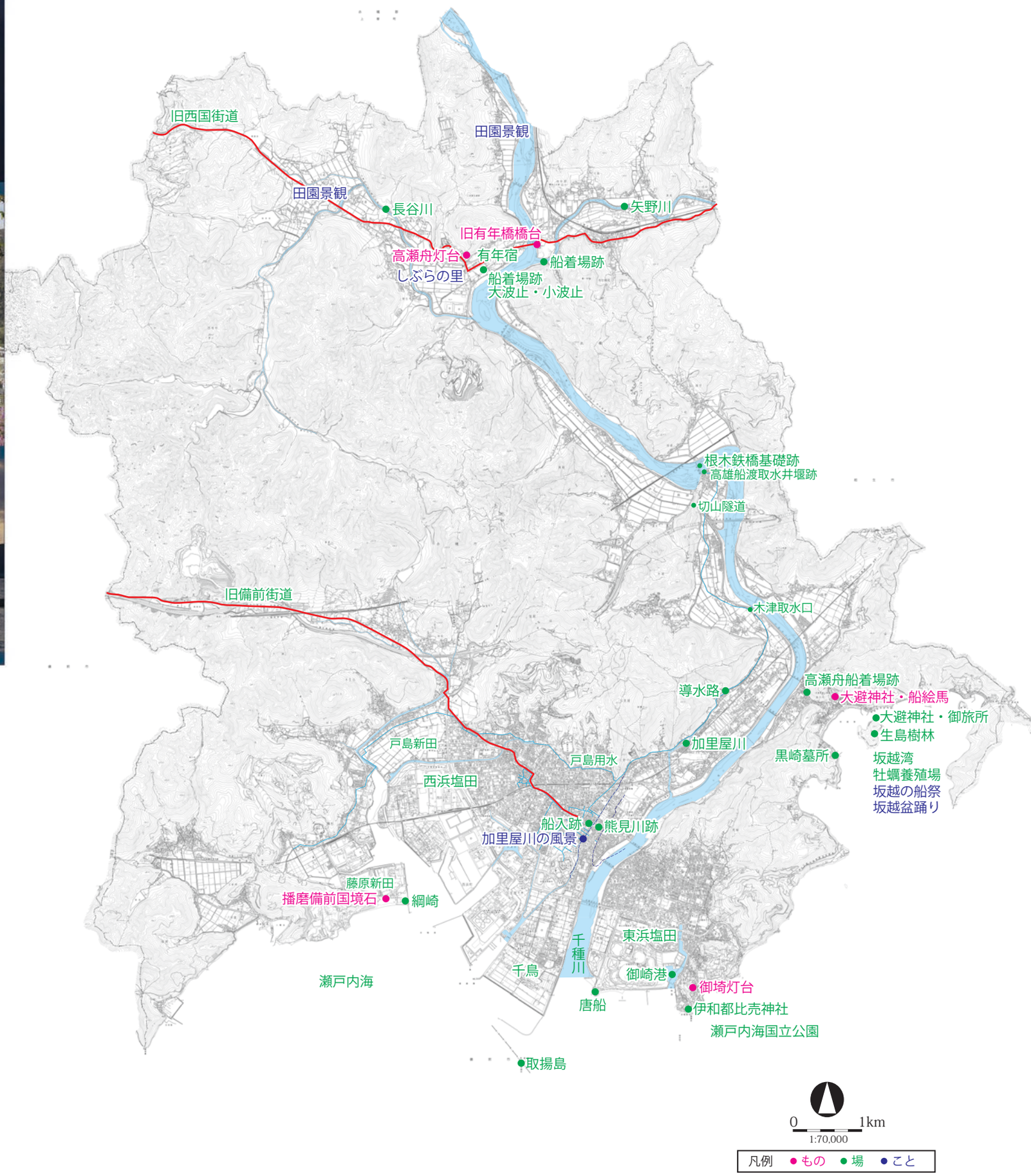
加えて千種川は、高瀬舟による南北交通の重要な流通ルートであったと同時に、東西交通にとっては難所となるため、そこに宿場町が形成される原因にもなりました。このように、千種川は赤穂の自然景観と歴史に様々な点で影響を与えてきました。

千種川が、内陸のつながりを創り出したとすれば、瀬戸内海は、外の世界とのつながりを創り出したと言えます。

波の穏やかな瀬戸内海は、九州から大阪に至る交通の大動脈であるだけでなく、江戸時代には西廻り航路が開発されて西日本の一大物流ルートとなっていました。常に外からの文化と触れ合う港町には、進取の気風が漂い、内外に新たな文化を培いました。

いまだ自然の景観を多く残す千種川と瀬戸内海は、多くの人々を魅了し続けています。

■主な歴史文化遺産の分布



千種川 ～赤穂を創り、育んだ川～

千種川流域は、比較的急峻な山地と狭隘な平野が特徴で、水深が浅く流速が早いことから清流を誇り、日本名水100選にも選定されています。しかしそれは逆に、洪水がたびたび起こることを意味していました。

洪水は、人々の生活に甚大な被害を与えましたが、一方で運ばれた土砂は河口部に広大な土地を創り出し、人々に新たな生活の場所を提供しました。

特に、現赤穂市街地である河口部はもともと海中にあり、千種川の運ぶ土砂によって生活の舞台が創り出されました。赤穂城や赤穂の塩田も、千種川が運び込んだ土砂がなければ生まれなかったのです。

海中の時代　かつて、現在の赤穂市街地は海中にありました。このころは、「大津」などの地域が、海岸線であったと推定されています。平地が少ないながらも、港がつくられていたようです。

荘園の時代
平安時代　9世紀頃
千種川が運ぶ土砂によって河口部の陸地化が進み、広大な遠浅の海浜を背景として、塩づくりが行われ、東大寺の荘園などにもなっていました。

加里屋古城の時代
室町時代　16世紀頃
室町時代には、海岸沿いの広大な陸地に砦が築かれ、姫路街道、備前街道が整備されました。

赤穂城の時代
江戸時代　17世紀～
さらに陸地化が進み、赤穂城と城下町が海沿いに築かれました。城下町の東西には広大な塩田が造られました。

開発の時代
近現代　20世紀
流下式塩田となっていた広大な塩田はすべて埋め立てられ、大規模な住宅地、工場地帯へと姿を変えました。

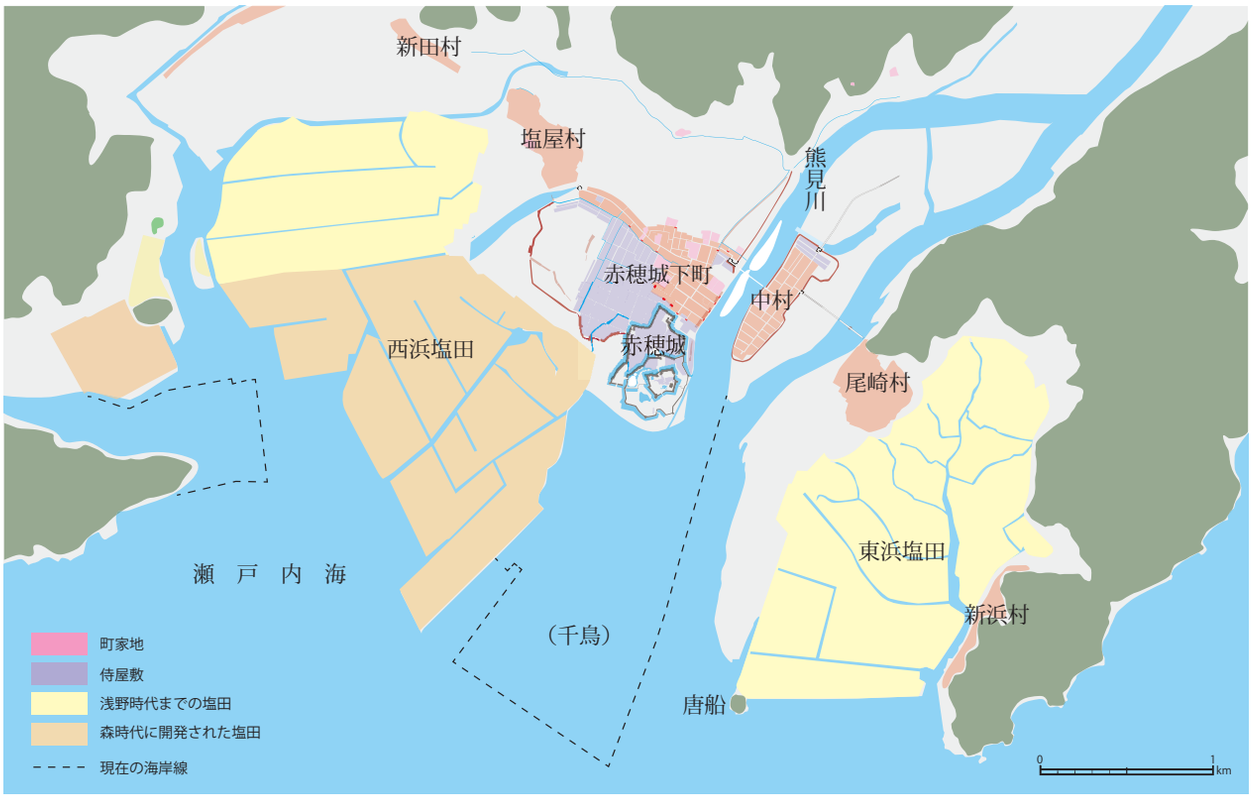
千種川河口部の開発

千種川河口部の景観を著しく変貌させたのが、江戸時代の塩田開発です。赤穂城の東西には、千種川の運ぶ土砂が生み出した遠浅の海を埋め立てた大規模塩田が、江戸時代初期から開発されていました。

池田時代に開発され始めていた塩田は、正保２（1645）年に赤穂に入封した浅野家によって東浜塩田を中心に開発され、森時代や近代になって西浜塩田が開発されて「赤穂の塩」を作り続けました。

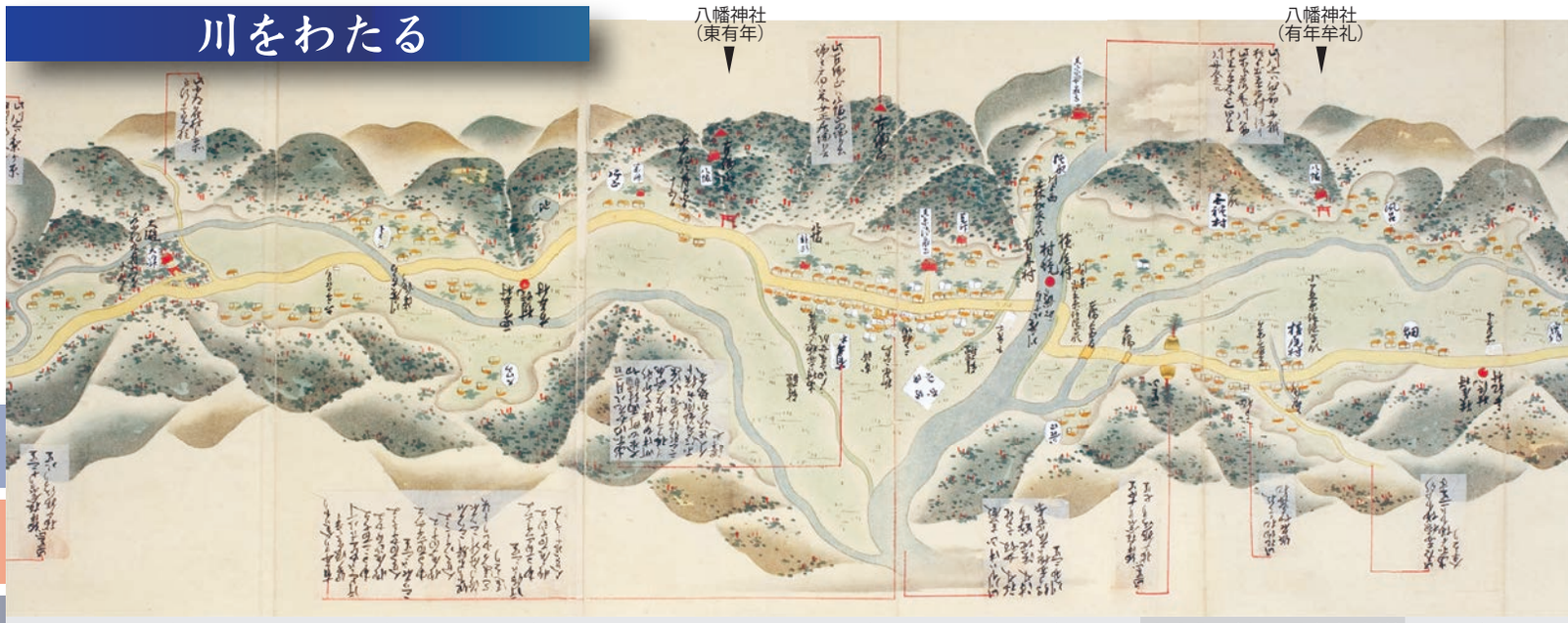
塩田が昭和37（1962）年頃に廃止されると、工場用地や住宅用地、公園用地となりました。

赤穂城の南沖であった千鳥地区は昭和18（1933）年には埋立てられ、その後は昭和23（1948）年から14年かけて開拓が行われました。このようにして、現在の赤穂の姿ができたのです。



江戸時代における千種川河口部の開発

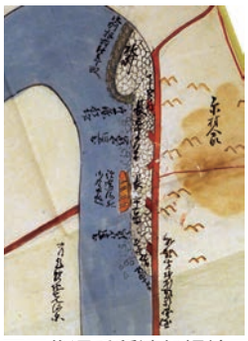
川をわたる



行程記（山口県文書館蔵）
江戸時代に萩藩が江戸への参勤交代の際に描いた記録。有年宿は、千種川沿いの宿場町として栄えた。

現在の私たちにとって、川に橋が架けられていることは自然なことですが、江戸時代には技術的に困難な場合や、関所など軍事的理由のために、架橋が許されなかったことがしばしばありました。

千種川でも、赤穂城下町周辺には橋が架けられましたが、それ以外の地域で橋が架けられることは稀で、徒歩渡しや船渡しによって、川を渡らざるを得ませんでした。そのため川が増水した時は渡ることができず、隣接して宿場町が発達したのです。こうした背景から、西国街道沿いの東有年で有年宿が栄えていました。



西国往還千種渡船場絵図
（原村文書
有年原自治会所蔵）

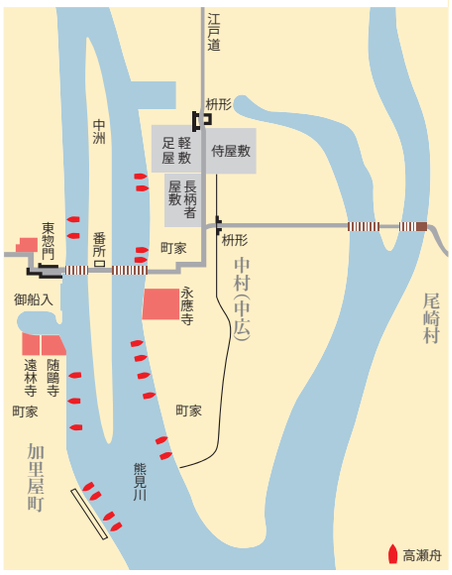
旧有年橋橋台
有年宿東の千種川には、明治43（1910）年になって橋が架けられた。現在も、レンガ造りの橋台の一部が残されている。

川を通る

一方、川は上流と下流とを結ぶ交通路にもなりました。千種川の川岸には各地で波止が築かれ、江戸時代には村ごとに高瀬舟をもつなど、物資の流通に利用されました。

下流部から上流部には、主に塩が運び込まれ、上流部から下流部には、年貢米のほか製塩資材などが運ばれたといいます。ただし、木津に赤穂水道を取水する井堰があったため、農業用水が必要な6・7月には通行不可となっていました。

高瀬舟船着場跡
坂越上高谷は、高瀬舟によって上流部から運ばれてきた物資を下ろし、坂越湾に浮かぶ廻船に積む拠点であった。現在も石橋の石材が残されている。



赤穂城下周辺の高瀬舟着岸場
浅野・森時代、明治時代の絵図面からの『赤穂市史』による推定図。

高瀬舟灯台
八幡神社（東有年）境内にある高瀬舟のための灯台。建立時期は不明だが、千種川をさかのぼるために船を曳いていく際の目印として利用された。

千種川の風景

千種川は、県下随一の清流を誇るだけでなく自然景観をよく残しており、流域の村々には今も水とみどり豊かな里山の景観を残している点が特徴です。そのため鳥類や水生生物の良好な生息地にもなっており、赤穂市の豊かな自然を体感できます。

市北部は「しぶら(＝ヒガンバナ)の里」として知られ、田園風景に朱色の映える景色を楽しめます。

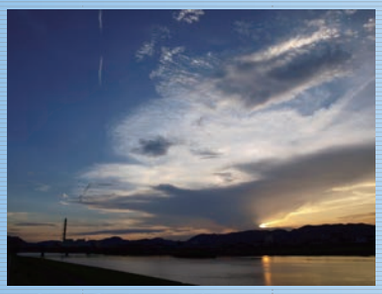
加里屋川

高雄山神護寺跡周辺からみた千種川

千種川(有年地区)

しぶら（彼岸花）

有年楢原の水車景観


赤穂大橋周辺の景観

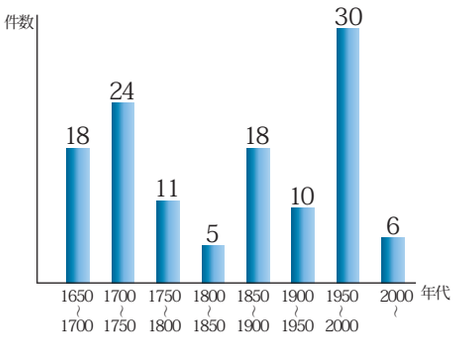
災害の記録

千種川は、播磨の他流域と異なって山地の開析が進んでいるため山が急峻で、また広い沖積平野が形成されていないことに特徴があります。

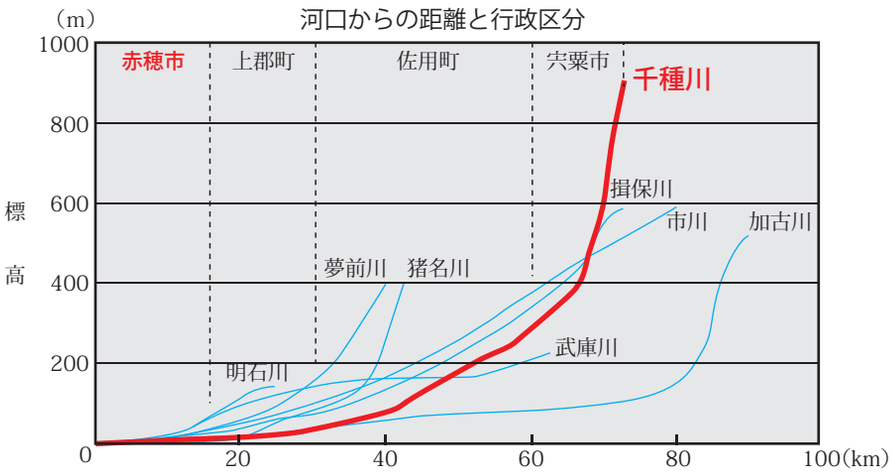
このような環境下では、川底が浅く流れが速い河川となり、アユなどの魚類が生息しやすい清浄な水質を保つ一方、常に洪水被害の危険性をはらむものでもありました。

特に、明治25（1892）年の台風に伴う洪水被害が甚大で、赤穂市内のほぼ全戸が大きな被害をこうむりました。このため、当時赤穂城の東に隣接していた熊見川の本流を、尾崎側に移動させたのです。

川の恵みは、危険と隣り合わせでもありました。



記録に残る災害件数



貞享4（1687）年	10月10日　大雨・洪水、破堤27,826間、橋流失29件、家屋流失27軒、潰家1,613軒、死者16人、城内橋塀破損
寛政元（1789）年	5月15～18日　大洪水、破堤、高野・木津・下高谷・野中・中村家屋流失123軒、潰家154軒、溺死11人
寛政4（1792）年	7月26日　大風雨、洪水、高潮、潰家238軒、半潰415軒
明治25（1892）年	7月23～24日　大雨、大洪水により破堤、家屋流失569軒潰家252軒、死者79人
明治35(1902）年	8月11日　台風、破堤1,308ヵ所、道路1,146ヵ所、橋梁345ヵ所、家屋全壊21軒
昭和13(1938)年	9月5日　台風、住家全壊5軒、床上浸水94軒、床下浸水1,701軒、道路45ヵ所、橋梁14ヵ所、河川67ヵ所
昭和36(1961)年	9月15～16日　台風、住宅全壊4戸、床上浸水75戸、床下浸水3,150戸、田畑冠水170ha
昭和45（1970）年	8月14～15日　台風、がけ崩れ39ヵ所、床上浸水110戸、床下浸水5,200戸、住宅全壊1戸、河川溢水15ヵ所
昭和49（1974）年	7月6～7日　台風、床上浸水702戸、床下浸水8,037戸、住宅全壊12戸、田畑流失・冠水978ha
昭和51（1976）年	9月8～13日　台風、床上浸水1,759戸、床下浸水8,090戸、住宅全壊11戸、田畑流失10ha、田畑冠水969ha

赤穂市における特に被害の大きい災害

瀬戸内海 ―開かれた世界へ

瀬戸内海は、穏やかな波風とその地形環境から、西日本の大動脈として重要な位置を占めています。瀬戸内海は外の世界との玄関口だったのです。

御崎　畳岩

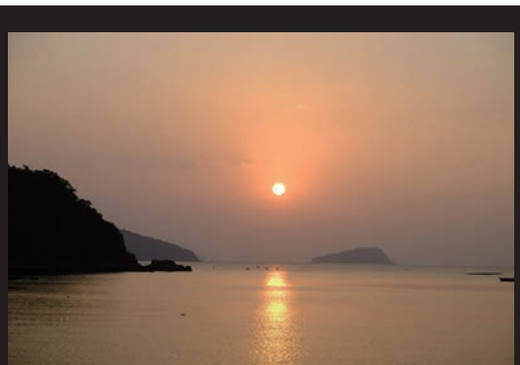
瀬戸内の風景と信仰

赤穂市沿岸部は、自然公園法に基づく瀬戸内海国立公園に指定され、特に坂越の生島は、特別保護区のほか樹林が天然記念物に指定されるなど、自然海岸が豊かに残されているのが特徴で、瀬戸内独特の多島海景観を体感することができます。

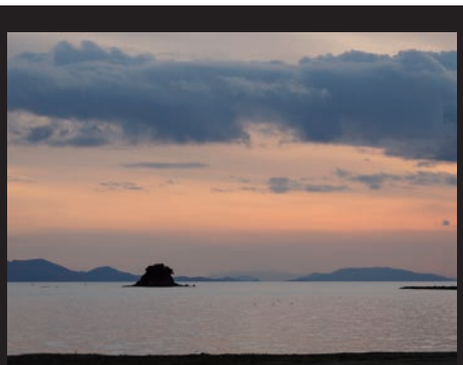
文化12（1815）年には、司馬江漢によって御崎の海岸が「嶋みさき数々見へて景色（ヨキケシキ）」と評されており、古来より「風景奇絶」の景観が維持されてきたことがわかります。

なお御崎地区周辺は、日本の夕陽百選に選定されており、取揚島や鷗護岩周辺の景観は、赤穂を代表する風景と言えるでしょう。

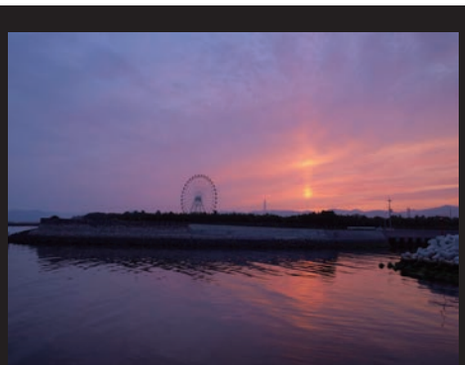
坂越湾と生島



坂越・大泊の日の出



取揚島



御崎港の夕陽

瀬戸内海沿岸の景観は江戸時代から景勝として知られており、信仰の対象にもなりました。現在は坂越地区に大避神社が、御崎地区に伊和都比売神社がそれぞれ祀られており多くの人が訪れています。

伊和都比売神社の鳥居

生島にある大避神社（坂越）の御旅所

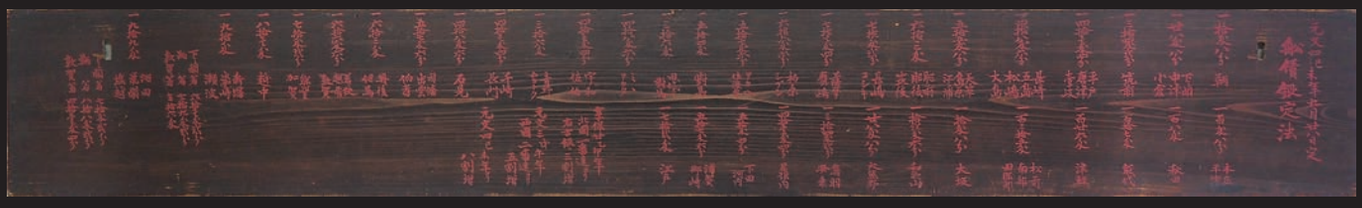
港・廻船

行程記（山口県文書館蔵）
江戸時代に萩藩が江戸への参勤交代の際に描いた記録。坂越大道から坂越湾沿岸の繁栄ぶりがよくわかる。

瀬戸内海は、波の静かな良好な航路として古来より利用され、江戸時代には西廻り航路によって、東北・北陸から西日本一帯が航路で結ばれました。

坂越地区は、湾状地形と風除けとなる生島の存在から天然の良港として栄え、江戸時代には廻船業で隆盛を誇りました。現在も、その名残を残す歴史文化遺産を数多く見ることができます。

船絵馬（大避神社／坂越）
明和6（1769）年のものが、今も絵馬堂に残されています。



船賃銀定法（個人蔵）　元文元(1739)年における坂越から全国各地への運送賃の一覧が描かれています。市指定文化財。

坂越盆踊り
平地が少なく広場がなかった坂越では、通りで2列になって盆踊りが行われる。市指定文化財。

坂越の船祭
大避神社の秋祭り。生島にある御旅所との間を船団が巡幸する。瀬戸内三大船祭の一つで、国指定文化財。

黒崎墓所
坂越海域で客死した全国の水夫たちの墓。北は出羽、南は種子島の人々が埋葬されている。妙道寺には、これらの過去帳が残されている。県指定文化財。

海と人の営み

牡蠣の養殖風景（撮影：出水伯明）

海に面した赤穂にとって、漁業権は重要な問題でした。村同士で山の境界を争う山論と同様その争いは激しく、例えば江戸時代初めには播磨国と備前国の境界について池田家がその設定をし、正保3（1646）年にその所有を分けた記録があります。

鵜和の綱崎と取揚島には播磨備前国境石が据えられ、それを結んだラインが播磨と備前の漁業権の境とされており、この漁業権は、日生町福浦が赤穂市となった現在も、そのままとなっています。

牡蠣の水揚げ風景

御埼灯台
昭和38(1963)年に建築されたもの。御崎のシンボル的存在。

風光明媚な瀬戸内の景観は、多くの人々を引き寄せます。現在、御崎地区の伊和都比売神社周辺は「きらきら坂」と称されて喫茶店や工房が並び、たくさんの人々が訪れています。

また現在、近海の海では牡蠣の養殖が盛んであり、牡蠣棚が浮かぶ景観も一つの魅力となりつつあります。

播磨備前国境石
綱崎と取揚島に設置されている標石。取揚島については、正保3（1646）年に播磨国、備前国の境界となり、後に石標が建てられたという。

きらきら坂（御崎）
伊和都比売神社の近くにあるスポット。赤穂の海に惹かれた人たちが店を構えている。

恋人の聖地モニュメント
日本の夕陽百選や恋人の聖地に認定されている。

坂越鍋島周辺の牡蠣の養殖風景

唐船サンビーチ
海岸沿いにはこのほか2箇所の海水浴場がある。

まちなみと風景

坂越のまちなみ

御崎・きらきら坂

千種川河口部

■ストーリー

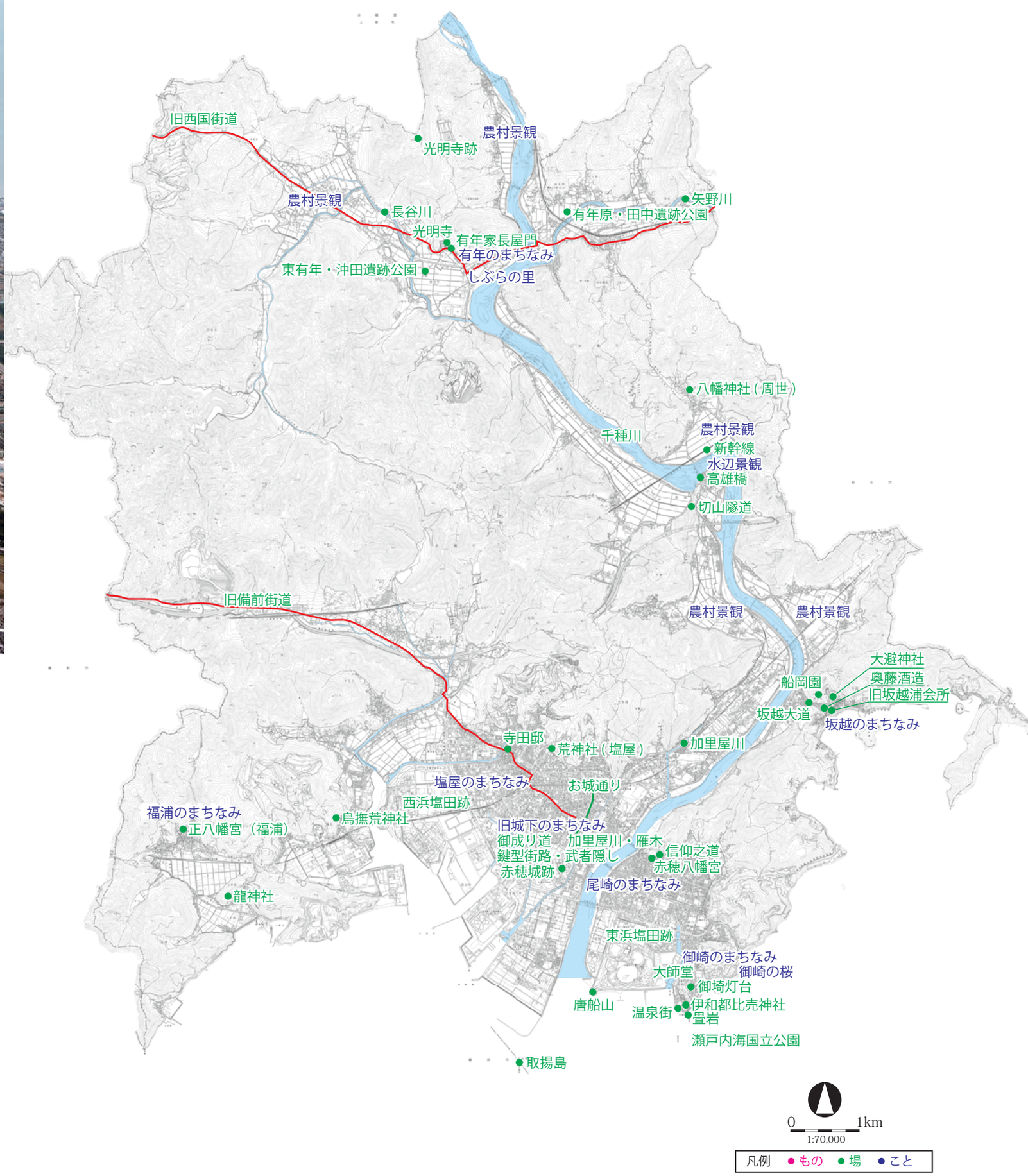
多島美を誇り、波穏やかな瀬戸内海や、清流千種川に抱かれた赤穂には、山、川、海それぞれに蓄積された歴史的なまちなみが形成されました。

市北部には、橋の架けられなかった熊見川（現在の千種川）の船渡沿いに宿場町「有年宿」ができ、現在もその一部が名残をとどめています。

市内を南北に貫流する千種川沿いには、かつて堤防に囲まれた村々が営まれており、富原、高雄、周世、高野など、常に千種川との関わりの中で形成されたまちなみが残されています。

千種川河口部には、赤穂城に隣接して城下町が形成されたほか、西の構えの一部を形成した塩屋、さらには、かつての備前街道沿いに成立した新田、そして塩田面積を最大限確保するため、斜面地にムラを営んだ御崎など、それぞれに特色のあるまちなみが保全されており、その景観に豊かな歴史性を感じることができます。

■主な歴史文化遺産の分布



旧赤穂城下ー絵図を見て歩けるまち。

旧赤穂城下は、鉄道や国道がわずかに離れて敷設されたため、一部を除き、江戸時代以来の道のほとんどが残されています。ＪＲ播州赤穂駅から赤穂城跡までの通称「お城通り」から一つ路地に入ると、古絵図に描かれたままの街路に出会うことができます。

赤穂城下は旧姫路街道、旧備前街道の起点となり、往時の風情をしのばせる古民家のほか、死角を作って見通しを悪くさせる鍵型街路などが数多く残されており、迷路のように迷う場所も少なくありません。

また赤穂の特色の一つとして、工場地帯となっているかつての西浜塩田跡地との間には緑地帯（グリーンベルト）が設けられており、桜の名所にもなっています。

旧備前街道　わずかにカーブを描き、見通しを悪くしている。

市街地景観形成重要建築物

「御成道」沿いの看板

鍵型街路
突然道幅が狭くなる街路が多数みられる。

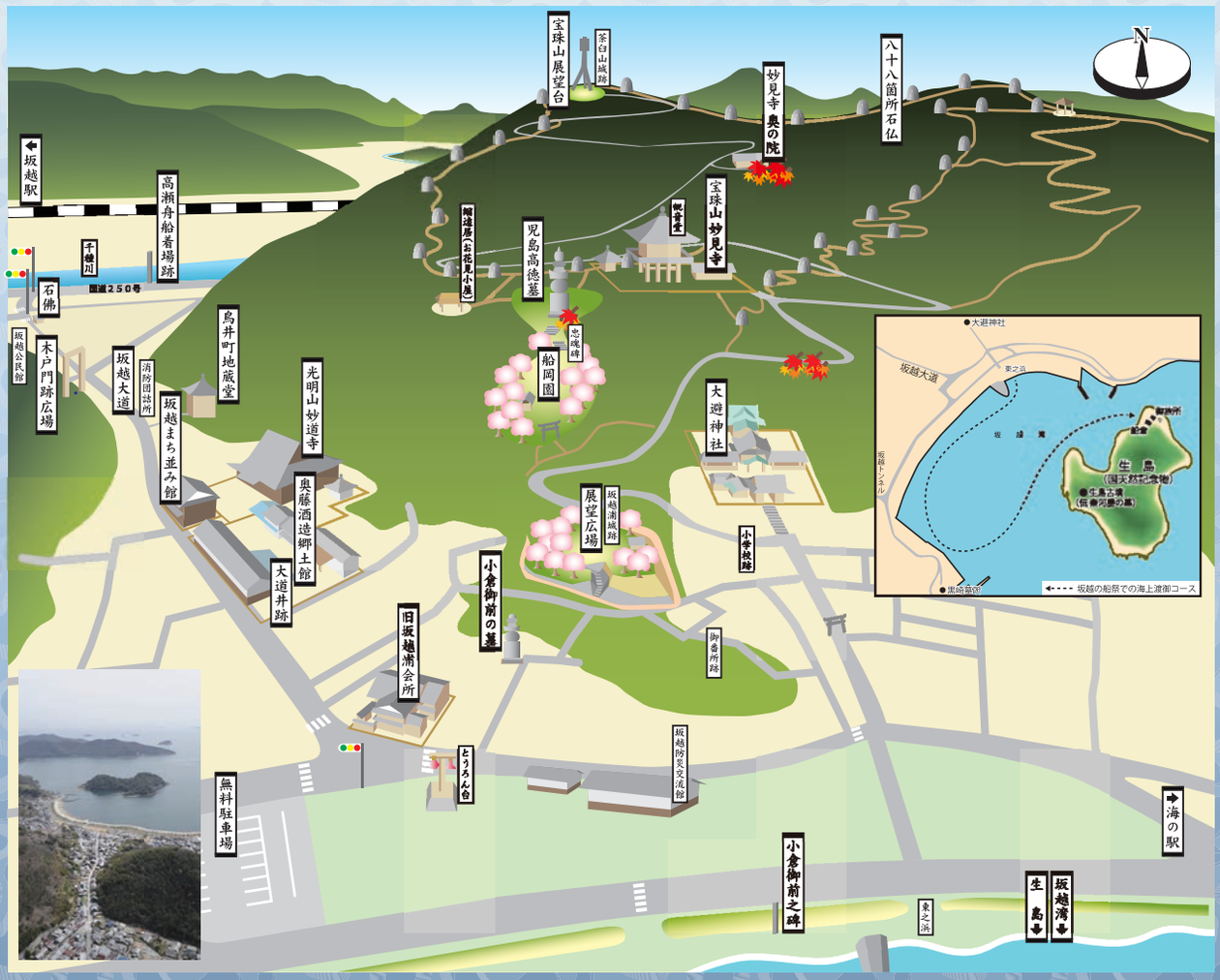
夜の旧城下
旧城下の街灯色にも風情がある。

万福寺の門前
室町時代から続く寺院も多い。

お城通り
平成10年に整備された。

加里屋川の護岸石垣に残る雁木
川に面していた旧城下の風情を残す。

グリーンベルト



坂越ー歴史的景観を残す港町。

江戸時代、西廻り航路の寄港地として**廻船が往来**した坂越。

千種川沿いの高瀬舟船着場跡から、**坂越大道を越**える際に見える歴史的**建造物**群、大道を越えたところに広がる瀬戸内海と生島。そして生島を見守るようにある宝珠山には、山裾に大避神社、中腹に妙見寺、山頂に八十八ヶ所石仏があり、周辺は桜の名所として知られています。

山、川、海、歴史的まちなみのすべてが凝縮されたこの空間を歩くと、**まるで時が止まったように感じられます。**

坂越大道
高瀬舟船着場から
坂越湾への交通路。

大避神社（坂越）
秦河勝を祭神とする。

旧坂越浦会所
市指定文化財の会所建築。

奥藤酒造
市内唯一の造り酒屋。

坂越のまち並み
山と瓦葺きが美しい。

路地
山麓に向けて傾斜をもつ。

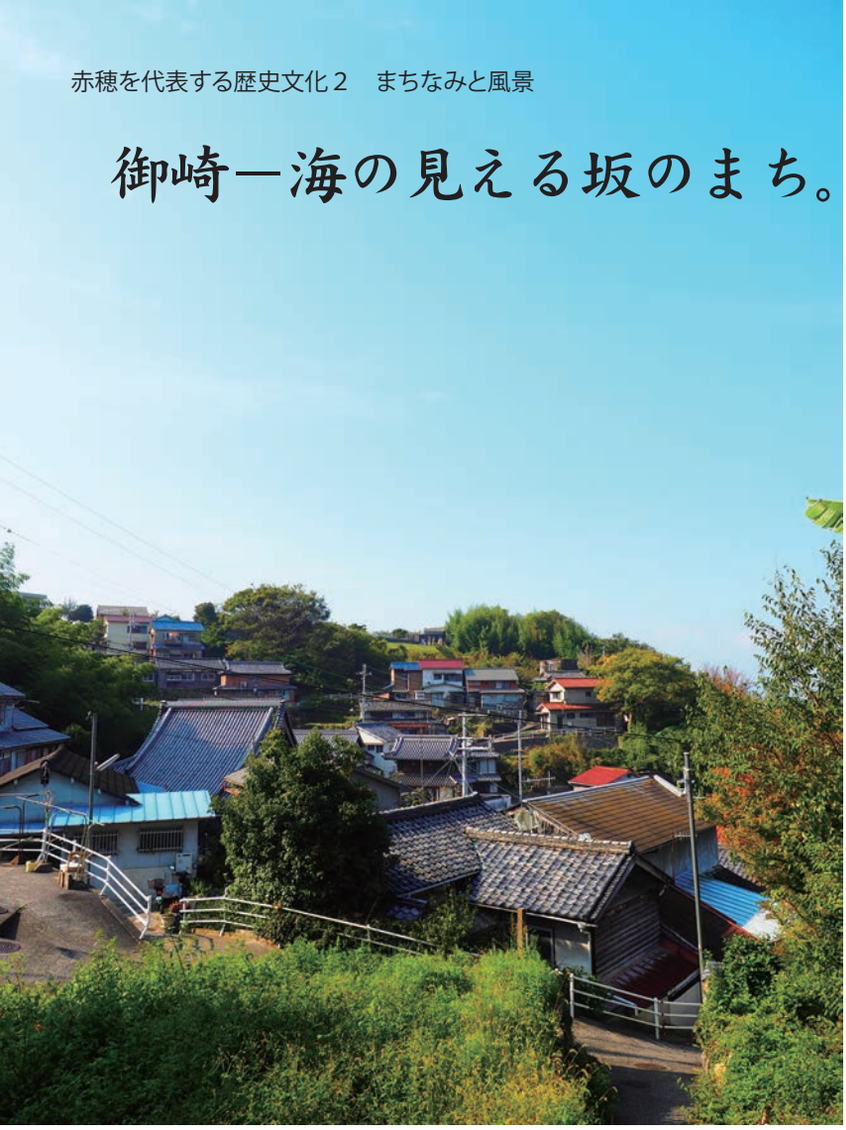
船岡園の桜
海を臨める絶景の桜。

御崎―海の見える坂のまち。

御崎は、かつての東浜塩田での製塩を支えた人々の暮らした村（新浜村）であり、塩田をできる限り広く確保するため「坂のまち」をつくり出しました。

歩いてみると、塩田のあった低地から、山側に延びる坂道を主要道として、無数に枝分かれする細い路地に特徴があります。また、地形にあわせて道がつくられたために出来たと思われる五差路、坂沿いに続く石垣、あちこちにある大師堂など、昔と変わらぬ風景に出会うことができます。

さらに御崎には、瀬戸内海に面した景勝地としての顔もありました。江戸時代にすでに景勝として知られていた御崎では、明治時代になると旅館が営まれ始め、現在では温泉街として、多くの人々が訪れています。



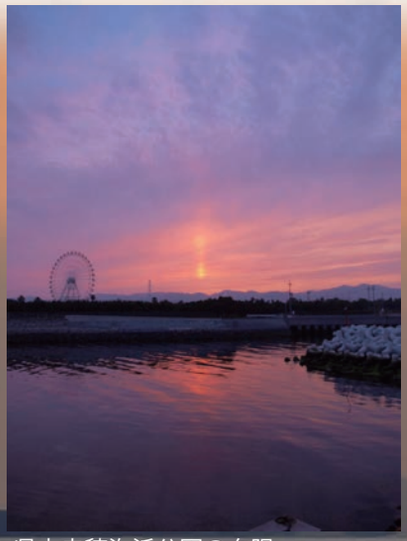
坂のまちの風景

十字路にある大師堂
不規則な路地が交差するところにある弘法大師堂。

御崎のまちなみ

きらきら坂

うだつのある民家



県立赤穂海浜公園の夕陽

御埼灯台

取揚島

尾崎・塩屋ーしおづくりのまち。

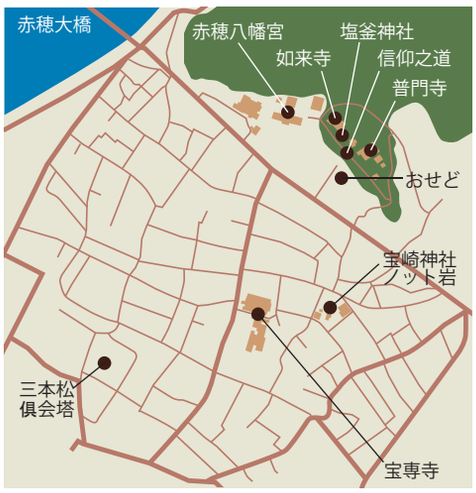
製塩の生産拠点であった東浜塩田と西浜塩田。両塩田のはじまりの地が尾崎と塩屋です。

尾崎には、千種川河口部一帯を氏子としていた赤穂八幡宮が鎮座し、その宮前には古くから集落が営まれており、現在も、その街路は主要道を除き変わっていません。

一方、塩屋は赤穂城下町の西に隣接する製塩の町として栄え、北の山麓には塩屋荒神社が鎮座します。こちらの街路も、江戸時代当時と変わらない景観を残しています。

二つの地はかつての自然堤防や砂州上に築かれたまちであり、街路形状が曲線を描き、また複雑に交差することに特徴があります。幅の狭い網の目状の路地に一度入ってしまうと、迷路の中にいるような感覚を覚えます。

尾 崎 ー東浜塩田をつくったまち



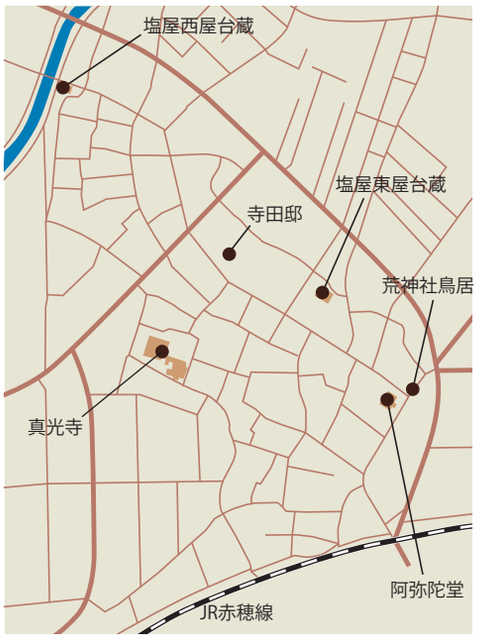
尾崎旧市街地の街路
尾崎のはじまりを物語る三本松、旧赤穂郡南部一帯に氏子をもつ赤穂八幡宮とノット岩のほか、様々な社寺が集中する。

路地
幅１ｍほどの路地も多い。

信仰之道
様々な社寺が集まる。

おせど（伝大石良雄仮寓地跡）

塩 屋 ー西浜塩田をつくったまち



塩屋旧市街地の街路
曲線を描く街路が、当時の瀬戸内海沿いに形成された砂州を思わせる。現在も狭い街路や路地が残されている。

真光寺周辺のまちなみ

真光寺

荒神社（塩屋）

路地

山と川に抱かれたまち。

千種川と新幹線（高雄橋上から）

高雄～坂越　－川に抱かれたまち

高雄から坂越地区は、地区の中央を流れる千種川と、その両脇に広がる山々が織り成す豊かな自然に囲まれています。

しかし、洪水の多かった千種川沿いでは、例えば輪中を形成している高雄地区のように、人々は千種川の流れの影響を受けにくい場所に住むことが一般的でした。現在も、こうした立地はほとんど変わっておらず、旧村ごとに神社や寺院が祀られた、昔ながらの景観を残しています。

また、現在は赤穂市を東西に貫く新幹線が通っており、その周辺は新たな見どころとして注目されています。

千種川

加里屋川

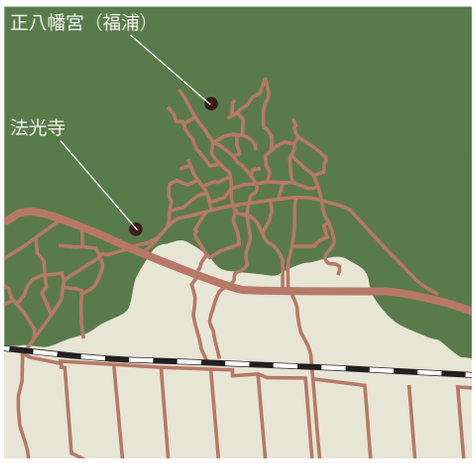
八幡神社（周世）

川漁

切山隧道

千種川土手とバス停

西 部　－国境のまち



福浦本町の街路
斜面地に立地する福浦本町は、車が通れないほど狭い道が縦横無尽に張り巡らされている。

かつて瀬戸内海が眼前に迫り、平野が少なかった西部地区には、山麓の斜面地に沿って集落が営まれました。平地は江戸時代以降の干拓によって生まれましたが、現在もまちは平地に拡大せず、斜面地にその多くが残っています。

鷆和、真木、福浦といった地区では、山側に神社が配され、斜面地に幅の狭い道が縦横無尽に張り巡らされた、かつてのまちなみが現在も良好に残されています。

鳥撫荒神社

龍神社からの眺望

正八幡宮(福浦)の楠

有年―古代の歴史遺産が残されたまち。

黒沢山山頂の光明寺跡

現在の市街地である千種川河口部に陸地が形成されるまで、千種川流域において最大規模の平野を誇っていた有年は、縄文時代以降の多くの遺跡が発見されており、古代から交通の要衝として栄えました。中世には、山城が多数築かれたほか、山岳寺院も盛んに建立されるなど、豊かな歴史を誇っています。

中世には筑紫大道が、江戸時代には西国街道（近世山陽道）が通り、西播磨最大の宿場町が営まれ、近代には山陽鉄道と赤穂鉄道が敷設され、交通・流通の拠点となっていました。

このような豊かな歴史をもつ有年は、現在広大な農村に姿を変えており、大きな開発がなかったために、多くの歴史文化遺産がそのまま残されているのが特徴です。

東有年・沖田遺跡公園
弥生ムラと古墳ムラに分かれて竪穴建物が復元されている歴史公園。県史跡。

光明寺
紅葉の名所として知られる。境内には八十八ヶ所石仏もある。

彼岸花の咲く矢野川護岸

旧有年宿のまちなみ
旧有年宿は、現在も旧西国街道沿いに家々が建ち並び、周囲の田園風景のなかで特徴的なまちなみを形成している。

有年家長屋門（市指定）
旧西国街道沿いにあるかつての大庄屋、有年家の長屋門。市指定文化財。

有年原・田中遺跡公園
弥生時代の大型墳墓。有年には千種川をはさんで2つの歴史公園がある。県史跡。

塩の国

－瀬戸内海のめぐみ、赤穂の塩－

塩の国（兵庫県立赤穂海浜公園内）

伊和都比売神社

旧日本専売公社赤穂支局

■ストーリー

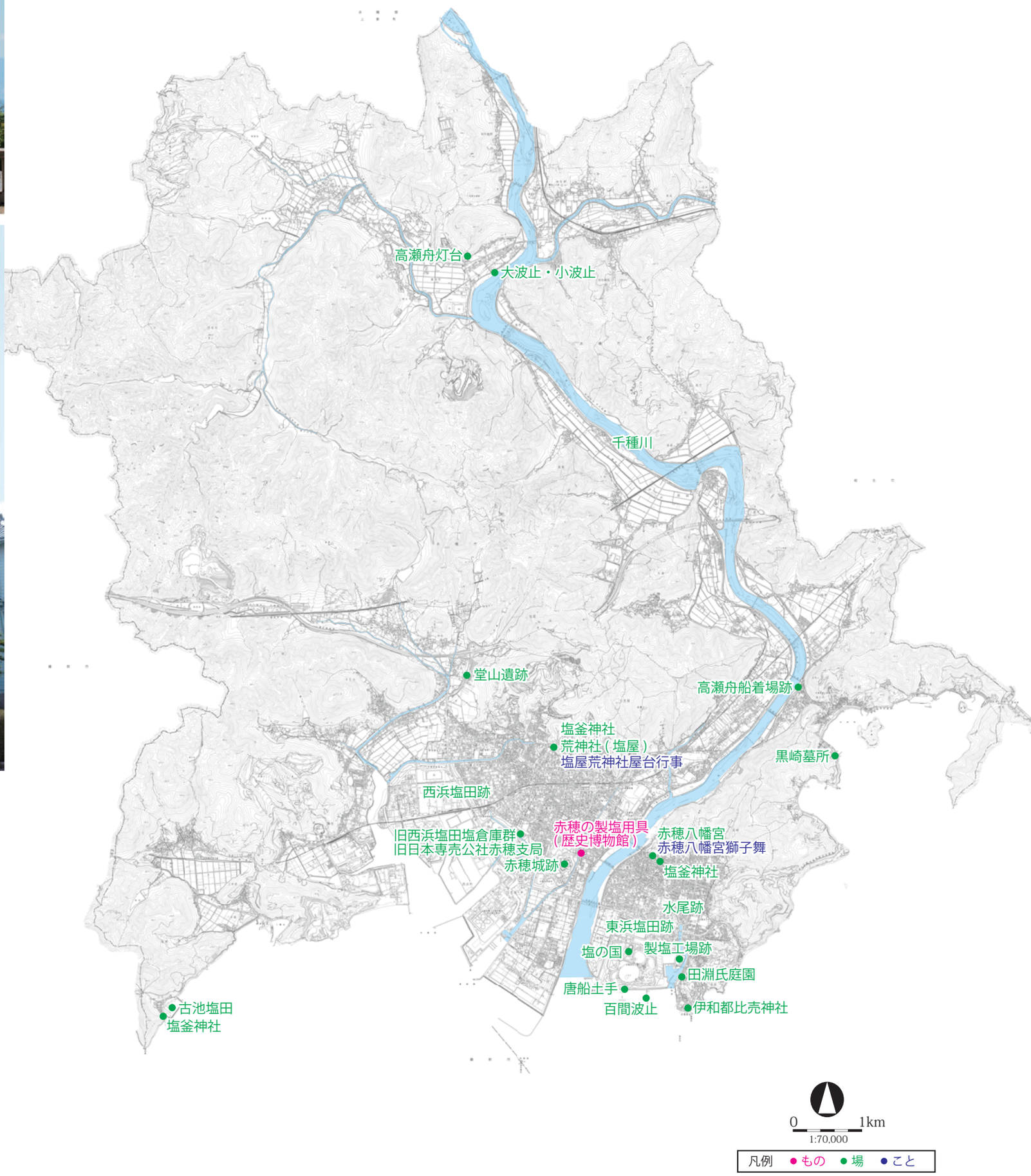
塩田による製塩は、雨が少なく日照時間の長い温暖な気候が適しており、瀬戸内海沿岸では、江戸時代に「十州塩田」と呼ばれるほど、塩の一大生産地となりました。

なかでも赤穂は、弥生時代以来の製塩の歴史を持ち、古代には東大寺の塩荘園があったほか、江戸時代には「赤穂式」と呼ばれた入浜塩田を全国に広め、大坂では専売制を敷くなどしました。製塩は現在も続けられており、長い歴史に裏付けられた「赤穂の塩」は今も有名です。

市内には、当時の水路（水尾）や堤防、製塩用具（国指定文化財）、旧日本専売公社赤穂支局（県指定文化財）などが今も残されているほか、県立赤穂海浜公園内には江戸時代から近代にかけての塩田が復元され、当時の製塩を間近に体感することができます。

「西国名所之内　赤穂千軒塩屋」
歌川貞秀
東浜塩田の景観を描いた錦絵。塩田外縁の石垣の堤防、釜屋、沼井などを詳細に描く。赤穂城も描かれている。

□主な歴史文化遺産の分布



赤穂の塩物語。

古代・中世

赤穂市塩屋にある堂山遺跡の発掘調査では、弥生時代末期の製塩土器が多数出土したほか、平安時代の塩田遺構が全国で初めて見つかり、この地が瀬戸内海の気候と地形を生かした歴史ある製塩地であることを明らかにしました。

平安時代には「石塩生荘」が東大寺の荘園となりますが、当時「坂越郷」と呼ばれた千種川河口部はまだ陸地化が進んでおらず、小規模なものだったようです。

中世になって河口部の陸地化が進行すると、洪水砂がもたらした肥沃な大地を求めて、山麓からの人々の移住が始まります。漁港としての機能も芽生え、中庄（現在の中広）に寺院や人々が集住するとともに、現市街地の場所に砦（加里屋古城）が築かれ、東の姫路方面、西の備前方面への街道が整備されました。

近　世

江戸時代になって播磨に入った池田家は、瀬戸内海沿岸で積極的な製塩を行い、姫路や高砂などで塩田が開かれました。

赤穂での製塩開始時期は明確ではありませんが、寛永 3（1626）年に入浜塩田開拓の伝承が残されているほか、1630 ～ 40 年代の古絵図には、すでに西浜に塩田が描かれていることから、やはり池田家が積極的に製塩事業を推し進めていたことがわかります。

製塩が本格化するのは、正保 2（1645）年、赤穂に 53,500 石で入封した浅野長直の時代です。翌年には姫路などからの移住が始まり、三崎新浜村をつくって、本格的な入浜塩田である東浜塩田を拡充させました。浅野家は、塩田によって得られた莫大な利益によって、城や城下町を拡大整備したといわれています。

江戸城松の廊下で起きた赤穂事件からしばらくして、森家が 20,000 石で赤穂を治めることになりました。森家時代には、塩田の開発資本の主体が在地商人や地主へと移ったことから、坂越奥藤家や御崎田淵家、塩屋柴原家といった豪商が塩田地主になり、廻船によって塩を全国に運ぶなどして莫大な利益を得ました。

近　代

明治維新後は東浜、西浜のそれぞれで塩業組合が組織されましたが、輸入塩からの保護、国内塩業の育成や財政収入の確保などのため、政府による専売制が敷かれました。

生産方法は、かつての入浜から流下式、そしてイオン交換膜式へと変遷し、現在も、赤穂では塩が生産されています。

土器製塩	弥生時代末期（200年頃）	塩屋堂山で土器製塩（堂山遺跡の発掘調査）
汲潮浜式	天平勝宝8年（756年）	「石塩生荘」が東大寺の荘園となる 塩山60町歩、塩浜50町9反172歩
古式入浜式	慶長～元和頃（1596～1624年）	古式入浜の成立形態が成立 千種川デルタに100町歩ほど存在
入浜式	寛永3年（1626年）	池田光政の家臣　岡田弥兵衛が尾崎浜に入浜塩田の開拓を開始
	正保3年（1646年）	姫路などから塩田労働者の移住始まる
	寛文7年（1667年）	唐船大土手築造される
	寛文12年（1672年）	三崎新浜村の成立
	延宝5年（1677年）	田淵家、新浜村塩問屋の営業開始
	元禄14年（1701年）	浅野長矩の吉良義央刃傷事件起きる（赤穂事件）
	文化6年（1809年）	赤穂藩、大坂での塩専売本格化
	文化9年（1812年）	生産過剰に伴う塩田不況により休浜同盟に参加
	文政4年（1821年）	赤穂藩　大坂塩専売法を廃止
	明治初期（1867年頃）	政府の自由市場公認政策により塩市場混乱
	明治22年（1889年）	赤穂製塩同業組合の結成（産塩の販売、石炭等の共同購入）
	明治25年（1892年）	千種川大洪水により、東浜塩田が壊滅的被害
	明治38年（1905年）	塩専売法施行、赤穂塩務局が設置される
	明治43年（191年）	赤穂西浜塩業組合設立
	大正13年（1924年）	赤穂東浜信用購買利用販売組合設立
	昭和13年（1938年）	東浜合同煎熬工場が完成
	昭和24年（1949年）	専売局から日本専売公社発足
	昭和26年（1951年）	赤穂町、坂越町、高雄村が合併し赤穂市となる
流下式	昭和33年（1958年）	流下式塩田への転換工事完了
	昭和35年（1960年）	西浜塩業組合解散、赤穂海水工業㈱設立
	昭和41年（1966年）	タテホ化学工業㈱創立（西浜塩業組合の化成部）
	昭和43年（1968年）	赤穂塩業資料館建設
イオン交換膜式	昭和44年（1969年）	赤穂西浜塩田においてイオン交換膜製塩に全面転換
	昭和44年（1969年）	「赤穂の製塩用具」が国の重要有形民俗文化財に指定
	昭和46年（1971年）	赤穂東浜塩業組合（旧赤穂東浜信用購買利用販売組合）が塩田での製造を停止
	昭和47年（1972年）	赤穂東浜塩業組合が解散 赤穂化成㈱設立
製塩法の多様化	昭和48年（1973年）	赤穂海水化学工業㈱（旧赤穂西浜塩業組合）特例塩（赤穂塩特級）の製造開始
	昭和48年（1973年）	赤穂化成㈱、特殊用塩（赤穂の天塩）の製造開始
	平成9年（1997年）	塩専売法廃止 塩事業法施行
	平成14年（2002年）	塩製造、販売とも一部を除き自由化
	平成16年（2004年）	赤穂海水㈱（旧赤穂西浜塩業組合）㈱日本海水に社名変更

塩を、つくる。

赤穂での塩の生産は、土器を利用した土器製塩から、海水の干満を利用して水汲みの労力を減らす汲潮浜（堂山遺跡）、さらに合理化された古式入浜、さらに水尾をめぐらす大規模な入浜塩田へと変遷しました。

特に入浜塩田では、年間の晴れる日数、日照時間に加え、遠浅の地形や、海の干満差が１m以上ある地域が最適とされており、赤穂は、そのすべてを満たしていました。

江戸時代には瀬戸内海沿いの地域で全国の８割以上の塩生産を担うほどに成長し、「十州塩田」と呼ばれるまでになりました。

塩づくりの変遷（赤穂市立歴史博物館模型より）

古式汲潮浜
古代から中世。干満差の大きい地域にのみ築かれた。

古式入浜
中世～近世。入浜塩田の原初的な形態。

入浜塩田
大規模に張り巡らされた水尾（水路）と塩田地盤によって合理化された。

体感できる製塩関連施設

塩の国の復元塩田

兵庫県立海浜公園内にあり揚浜塩田、入浜塩田、流下式塩田が復元されている。隣接する水尾は当時の遺構であり、流下式塩田では今も製塩が続けられている。

百間波止　海水の取水口でもある水尾に千種川の運ぶ土砂が入らないように築かれた。

古池塩田跡

江戸時代に入浜塩田として開発された塩田で、後に流下式となって廃止されて以後、残されたままとなっている。

水尾跡　塩田への海水の取水口であると同時に、上荷舟の通る水路でもあった。

赤穂を代表する歴史文化３　塩の国

塩を、運ぶ。

塩をつくるには、濃縮した塩水（かん水）を煮詰める作業が必要となり、莫大な量の薪が必要でしたが、これらは高瀬舟によって千種川上流部より薪が運ばれました。上流部にあたる有年地区には、高瀬舟の船着き場である大波止・小波止だけでなく、大変珍しい灯台が残されています。

東浜、西浜塩田でつくられた塩は、塩田に張り巡らされた水尾（水路）のなかを上荷舟が行き来し塩倉庫に運ばれました。西浜塩田の塩倉庫や水尾は現在も残されており、隣接する赤穂市立民俗資料館は、明治41（1908）年につくられた旧日本専売公社赤穂支局の建物群を利用したものです。

旧日本専売公社赤穂支局
兵庫県指定建造物。現在は赤穂市立民俗資料館となっている。

旧日本専売公社塩倉庫群
現在も塩倉庫として使用されている。（撮影：出水伯明）

黒崎墓所
坂越浦で客死した全国の水夫たちの墓。県指定史跡。

赤穂流塩田の広がり

赤穂で完成された入浜塩田は、江戸時代に全国各地にその技法が伝わりました。

赤穂の製塩法の広がり

高瀬舟灯台
塩などを運ぶ高瀬舟のためにつくられた、珍しい川の灯台。

赤穂ブランド第１号!?

文化６（1809）年、赤穂藩は大坂への塩専売を本格的に開始しました。藩は領内の塩販売の取り締まりを行い、藩の大坂蔵屋敷に送って落札を行うことで、塩取引の主導権を赤穂側に取り戻すことができました。

しかし一方、他国の船は赤穂塩を購入できなくなり、他所で買い入れた塩を赤穂塩と称して販売したり、偽赤穂塩を作る塩田も現れました。赤穂塩の評価が高かった証拠です。

塩づくりが、はぐくんだもの。

赤穂の主産業は常に塩であり、
赤穂の歴史の多くが塩業と関係しています。

塩廻船模型
赤穂市立歴史博物館に展示されている３分の１の模型。故・湊隆司氏（市選定保存技術保持者）による。

廻船業

天然の良港であった坂越浦は、廻船業で栄えました。

江戸時代後期になって、北陸を中心とする北前船の活躍が目覚ましくなっても、坂越の廻船は赤穂の塩を運ぶ塩廻船として生き残りました。

赤穂緞通の生産

児島なかという女性によって嘉永２（1849）年試作開始、明治７（1874）年より営業生産された赤穂緞通は、明治 20（1887）年に御崎に伝えられました。

男性による塩田労働だけでは収入が少ないため女性が多数働き、御崎を一大生産地にしました。

赤穂緞通（県伝統的工芸品）
独特の「摘み方」で生まれるくっきりとした文様が特徴。

まつり

江戸時代以来、赤穂には塩屋村（西浜塩田）及び尾崎村、三崎新浜村（東浜塩田）という塩業従事者の村があり、西浜に塩屋荒神社が、東浜に赤穂南部全域を氏子とする赤穂八幡宮がそれぞれ鎮座し、氏子を抱えていました。

この２社では、かつての塩業従事者の「心意気」を見せる盛大なまつりが残されており、両者とも指定文化財となっています。

塩屋荒神社屋台行事
江戸期より塩屋村の鎮守であった塩屋荒神社の秋祭り。東西２つの大屋台を含めた総数９台の屋台練りが繰り広げられる。市指定。

赤穂八幡宮獅子舞
赤穂城下町を含めて赤穂の鎮守であった赤穂八幡宮の秋祭り。２人の勇壮な鼻高が見もので稚児頭人行列（市指定）も残る。獅子舞は県指定。

豪商と文化

「西の柴原、東の田淵」と言われた両家のほか、坂越の奥藤家も隆盛を誇り、田淵家、奥藤家は現在も受け継がれています。

田淵氏庭園（国名勝）

化学薬品業

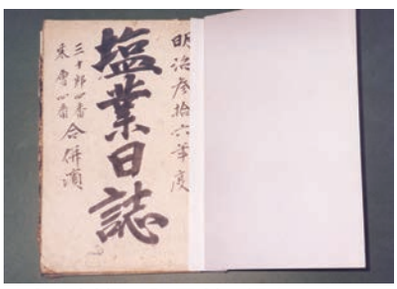
近代になると、塩生産の副産物である「にがり」から得られる塩化マグネシウムや炭酸マグネシウムといった化学物質に着目した企業が、赤穂に工場を設立します。

木村製薬所が明治 43（1910）年、塩野義製薬が大正 6(1917）年に工場を設立し、赤穂東浜塩業組合は昭和 22（1947）年、赤穂西浜塩業組合は昭和 23（1948）年に化成部門へ進出しました。これらの企業は、現在も名前を変え存続しています。

歴史資料からみる赤穂塩田

元禄期頃の塩田（元赤穂縣管轄絵図面＜城下図＞　東京大学史料編纂所蔵）
緑色の堤防に囲まれた部分が塩浜を示している。赤穂城をはさんで西浜、東浜に分かれていた。

船賃銀定法（個人蔵）
元文 4（1739）年における坂越から全国各地への船賃を示したもの。市指定。

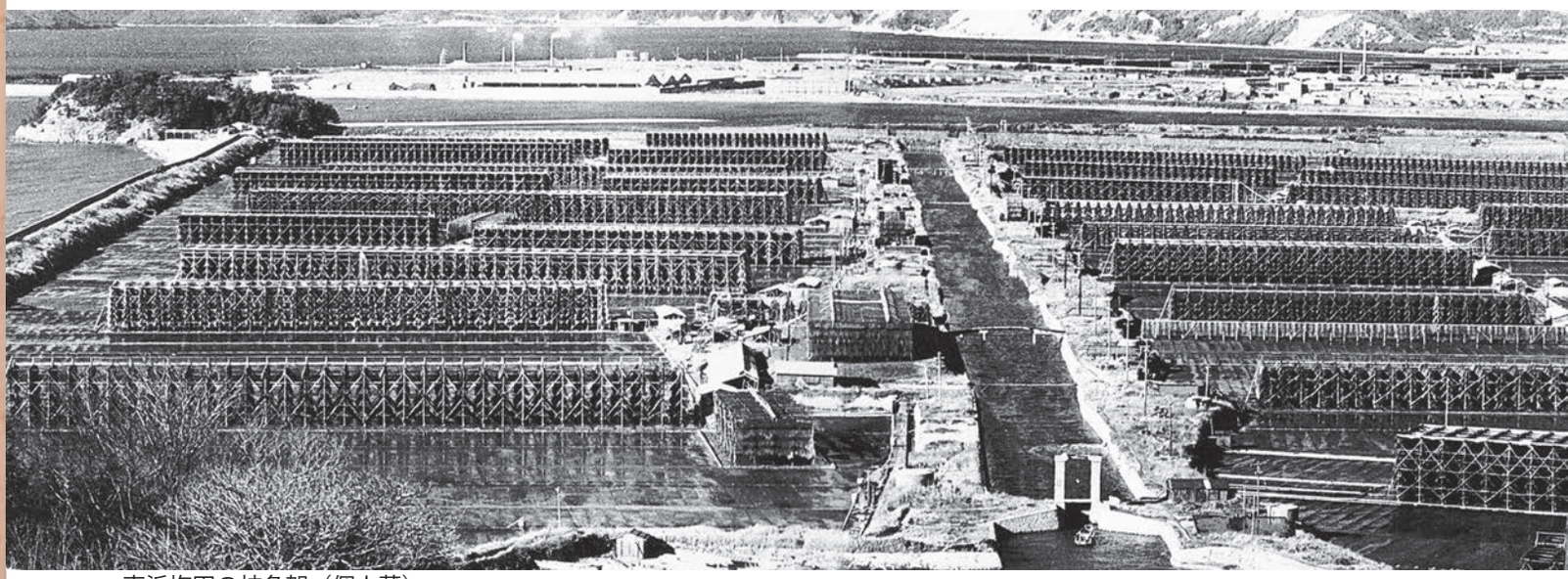


赤穂東浜信用購買利用組合文書
近代の東浜塩田関係文書。市指定。

赤穂の製塩用具
かつて入浜塩田で使用されていた製塩用具。国指定重要有形民俗文化財。

枝条架の広がる西浜塩田（株式会社日本海水旧蔵）

昭和 30 ～ 40（1955 ～ 1965）年代の西浜塩田。かつての入浜塩田を改良し、効率的な方法として枝条架を用いた流下式塩田が採用されたが、昭和 44（1970）年にはイオン交換膜法に転換したため、塩田は不要となった。



東浜塩田の枝条架（個人蔵）

昭和 30 ～ 40（1955 ～ 1965）年代の東浜塩田。水路（水尾）に隔てられた区画（墹）それぞれに枝条架が並んでいる。右奥には西浜塩田も見える。

赤穂の塩のこれから

江戸時代に営まれた東浜、西浜塩田は、近代に赤穂東浜塩業組合、赤穂西浜塩業組合となり、現在はそれぞれの系譜をひく民間の塩メーカーとなっていますが、その歴史的経緯は大きく異なるものでした。

昭和 46（1971）年、塩専売制度下で第 4 次塩業整備事業が行われ、海洋の環境変化や塩価格低減への対応のため、塩田製塩を廃止し、イオン交換膜製塩に転換されることになりました。

このとき解散した赤穂東浜塩業組合は、化成品部門を母体として会社を設立し、塩田製塩の塩に近い、天日塩に「にがり」を加えた「特殊製法塩」の生産認可を受け、製塩を続けることで、東浜塩田の命脈を保ちます。

一方、専売制下でイオン交換膜法による製塩を続けた西浜塩業組合は、化学的に純度の高い塩の生産を行うようになりました。

平成 9（1997）年には塩専売法が廃止され、塩の製造販売が自由化されましたが、現在も赤穂では、国内の塩生産の約 2 割を生産し、また「特殊製法塩」の代表企業も営まれています。赤穂は、今も「塩の国」なのです。

また、塩だけではなく、塩の生産過程で生まれる「にがり」や、塩の性質を利用した、様々な活用が行われています。

赤　穂　弁

塩業に従事した浜男たちの方言は、少し荒い口調が特徴の播州弁の中でも、特に激しいものでした。

ベッチョナイ	オーケーヨ
オッテダスカー	○○シテッカーレ
オマハンラ	ナニションナイヤ
デーナンネー	ドナイガイキヨンナー
ドエレエ	ケーナモン

西浜塩田図　明治 6（1873）年のもの。（赤穂市立歴史博物館所蔵）

赤穂事件と忠臣蔵文化

「義士討入」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち（赤穂市立歴史博物館蔵）

赤穂義士祭

赤穂城跡ジオラマ（赤穂市立歴史博物館）

■ストーリー

天下泰平の世、元禄時代を騒がした大事件「赤穂事件」は、元禄 14（1701）年に、江戸城で赤穂藩主浅野内匠頭長矩が吉良上野介に斬りかかったことに端を発します。幕府の不公平な裁きを不服とし、1 年 10 か月後に討入りをはたした旧赤穂藩士たちのことを当時の人々は褒めたたえ、人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として「仮名手本忠臣蔵」が生まれました。

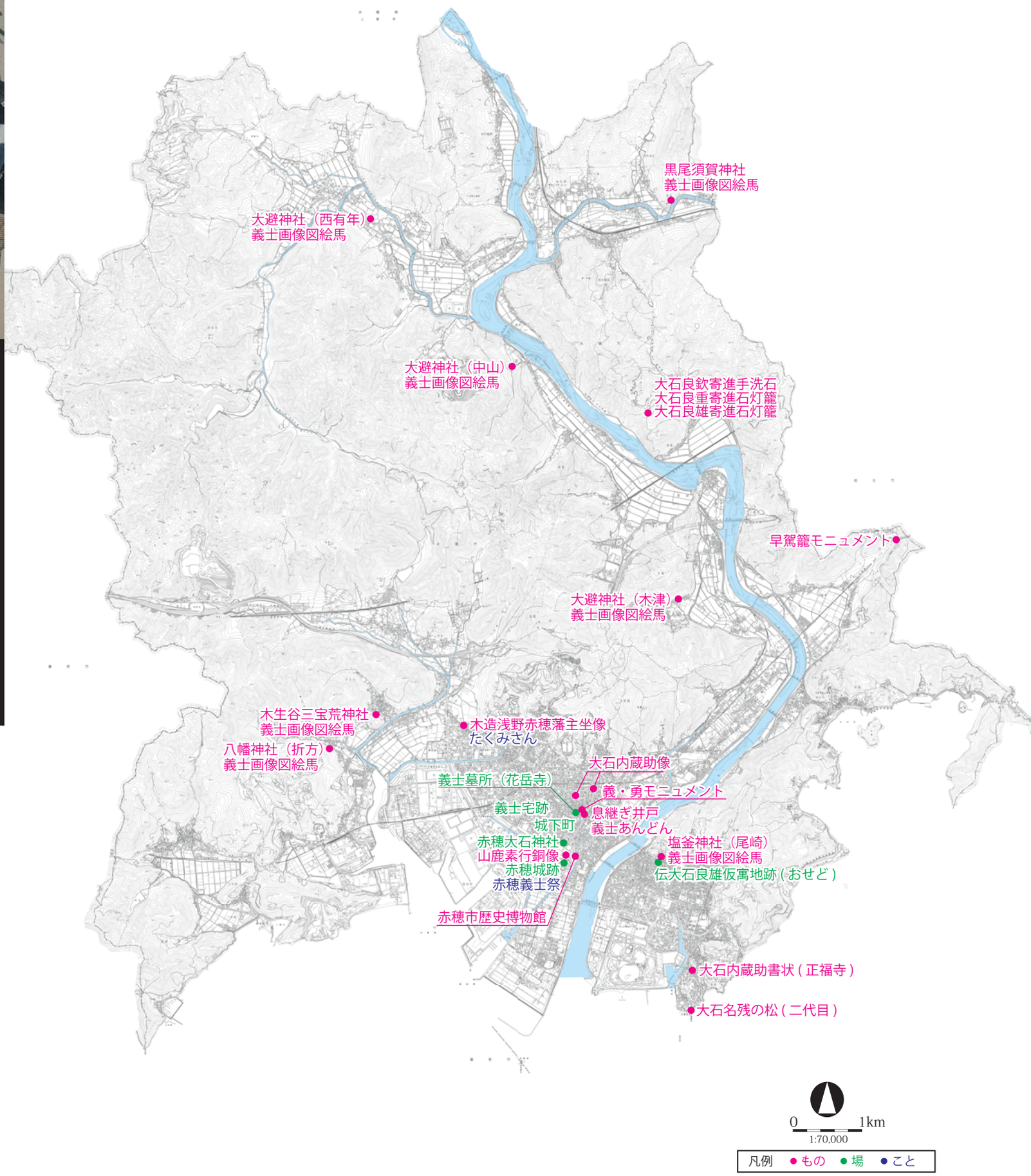
「忠臣蔵」の名で親しまれるこうした一連のストーリーには、史実のみならずさまざまな虚飾も加わり、日本人の心の拠りどころになりました。現在では演劇や映画など文化としての広がりを見せています。

赤穂市には、「赤穂義士」を生んだまちとして、その遺産が数多く残されており、その歴史のみならず赤穂義士のこころに触れることができます。

事件の流れ

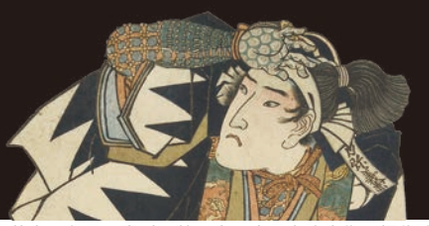
元禄14(1701)年	
3月14日	江戸城本丸御殿松之廊下で赤穂藩主浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に斬りつける。浅野長矩は即日切腹。
3月19日	藩主刃傷・切腹の知らせが赤穂に届く。
3月27日	赤穂城で大評定始まる。
4月 19日	赤穂城の明け渡し。 龍野脇坂藩による在番が始まる。
6月25日	大石内蔵助、赤穂城下を退去し、28日には山科に転居。
元禄15(1702)年	
7月18日	浅野大学、広島本家に預かりとなる。
7月28日	円山会議。討入り決定。
12月14日	吉良邸に討入り、義央を討ち取る。
元禄16(1703)年	
2月4日	46人切腹。吉良義周は信濃に配流。
宝永6年(1709)年	
8月20日	綱吉死去の大赦により浅野大学赦免。
宝永7年(1710)年	
9月16日	浅野大学、500石を賜り浅野家再興。

■主な歴史文化遺産の分布



赤穂事件をたどる

刃傷事件から赤穂城開城まで



「仮名手本忠臣蔵十一段目　夜討人数ノ内　大星力弥肖像」初代歌川国貞

事件の発端

元禄 14(1701) 年 3 月 14 日午前 11 時ころ、江戸城本丸御殿松之大廊下で事件は起きました。赤穂藩主浅野内匠頭長矩が、高家筆頭吉良上野介義央に「この間の遺恨覚えたるか」と声をかけ、振向いたところを斬りつけ、逃げようとする上野介の背中にまた一太刀あびせたのです。赤穂事件の発端です。

浅野は、刃傷の直後「上野介にはこの間中、意趣があるので、殿中、しかも今日の事、恐れ入るが、是非に及ばず討ち果そうとした」と述べています。吉良自身が意識していたか否かは不明ですが（吉良は恨みを受ける覚えは無いと述べています)、浅野は吉良に対して意趣を持っており、この事件は決して突発的な事故ではなかったのです。

この年、吉良は 1 月 28 日に上洛、参内し、江戸へ帰ったのは 2 月 29 日でした。一方、浅野は 2 月 4 日に勅使御馳走役を拝命し、3 月 10 日までに準備を整えて伝奏屋敷に詰めねばならなりませんでした。双方とも時間的余裕がなく、かなり気が立っていたとしてもおかしくありません。浅野が短慮であったにしろ、また吉良に悪意があったか否かは別にして、吉良は浅野に対してきつく叱りつけたり愚弄するなどのパワハラを起こしていたと考えられています。そのような小さな要因が積み重なり、浅野はそれに耐えがたき侮辱を覚え、刃傷に及んだようです。しかし、それは吉良にとってはごく日常のことであり、特に思い当たるほどのことではなかったのかもしれません。

なお、今日的な感覚からは「この間中」は「数日前から」のように考えられますが、当時の感覚では、もっと短い期間である可能性もあります。そうでなければ「上野介にはこの間中、意趣があるので」という浅野の言葉の説明がつきません。

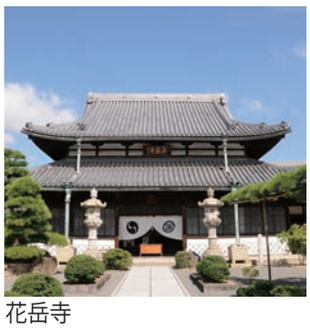
赤穂城跡（国史跡）
浅野長直が築城した。

山鹿素行銅像
赤穂藩に大きな影響を与えた。

大石良欽寄進手水鉢
神護寺に奉納された。市指定。

赤穂城跡二之丸庭園（国名勝）
大石頼母助屋敷に隣接していた。

浅野長矩坐像（光浄寺蔵）
赤穂藩浅野家三代藩主。市指定。

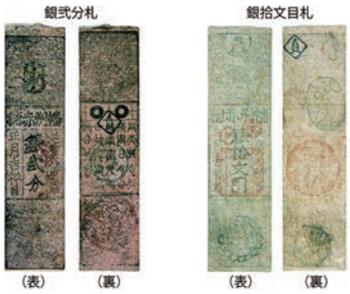


花岳寺
浅野家菩提寺で義士墓所もある。

「殿中刃傷」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち
（赤穂市立歴史博物館蔵）

早駕籠モニュメント
高取峠にある事件の一報を伝えた早駕籠モニュメント。

息継ぎ井戸
早駕籠が一息ついたと伝える旧上水道の汲出枡。



赤穂浅野家藩札
刃傷事件後、速やかに回収されて焼却処分されたため、浅野家の赤穂藩札は全国に5枚のみしか確認されていない。市指定。

幕府の不公平な裁定と処罰

浅野が吉良に斬りかかり、吉良は無抵抗であったのですから、今日的な感覚からは、この事件は喧嘩とは言いがたいと思われるかもしれません。

しかし元禄の時代、武士が武士に遺恨をもって斬りつければ、それは喧嘩にほかならなかったのです。事件を見聞した武士たちはそう感じていましたし、後に吉良邸に討ち入った大石内蔵助ら浅野旧臣らもそう考えていたのです。

この幕府によるお手軽で不公平な裁定が、1年10カ月後の元禄15年12月14日に吉良邸討入り事件という第2の赤穂事件を引き起こしたのです。

早駕籠と城明渡し

浅野家江戸屋敷から2度の早駕籠、その間に長矩の実弟で養子の浅野大学長広からの足軽飛脚が赤穂へ凶報と指令をもたらしました。

赤穂では世に名高い藩札の六歩替え（藩札を額面の6割に相当する銀・銭に交換）に加え、藩士への退職金支給、城と領地の明渡し準備に奔走することとなりました。

さてこの前に、赤穂城を幕府の命令どおり明渡すか否かの議論が百出しました。籠城、あるいは殉死を望む者達もいましたが、「(浅野) 大学様が人前に立てるようにならないことには、このままではおかない。以後の含みもある」という大石の主張が受け入れられ、無事に開城する運びとなりました。しかも大石は、切腹する覚悟のある者達から神文血判を取り、家臣の心を一つにまとめることにも成功しました。

7月に浅野大学の広島藩差し置きが決まり浅野家再興の望みが断たれた為、京円山会議で大石・原・堀部ら19人が仇討ちを決議し、堀部親子ら急進派の分裂を避けることができたのです。

播州赤穂家中近辺町在之絵図
（たつの市立龍野歴史文化資料館蔵）
元禄期の城下図に赤穂城請取りルートが記載されている。

赤穂城御請取行列之内抜書（部分）外内松意筆
天明4（1784）年　たつの市立龍野歴史文化資料館蔵
脇坂龍野藩が赤穂城請取りを行った際の絵巻。

連署起請文
井口半蔵・木村孫右衛門が、一度は大石内蔵助に提出して同志を誓った連名の起請文が、同志から脱落したために残されたもの。血判が押されている。市指定。

伝大石良雄仮寓地跡（おせど）
赤穂城開城後に大石内蔵助良雄が残務処理を行う間、仮住まいしたと伝える。現在は桜の名所となる。市指定。

赤穂事件をたどる

討入り、幕府の処分

吉良邸討入り

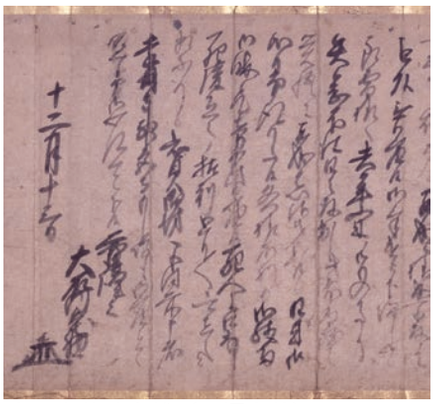
刃傷事件から１年 10 カ月の後、元禄 15 年 12 月 14 日深夜、大石ら浅野旧臣は江戸本所の吉良邸に討入り、上野介を討取って泉岳寺の亡君墓所へ首級を捧げました。

なぜ大石らは吉良邸に討入らねばならなかったのでしょうか。彼らの妻や子に遺した遺書には「討入りに成功しても失敗しても、死があるのみ」「家族にも罪が及ぶであろうが、取り乱さないように」などと書かれている。それらを読むと冷静で綿密な計画のもと、死を覚悟して討入ったことが分かります。

「高家（吉良）のような方に対して家来共が鬱憤をだくことは申訳ないことですが、君父の敵と共に天をいただくことは我慢できません。きょう上野介殿のお宅へ行き、亡主の意趣を継ぐ志である」というのがその大意です。

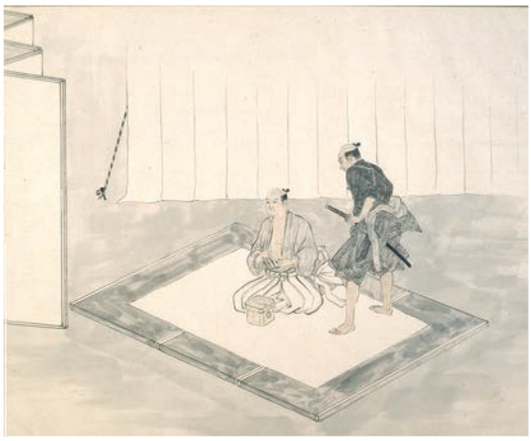
この内容を見ると“亡君の遺志を継いで吉良を討つ”ということを訴えています。これが第１の討入り理由です。しかしそれはむしろ建前の理由、表向きの目的なのです。大石らの考えはもっと深いところにあり、幕府がみずから破った喧嘩両成敗法を自らの手で完結することだったと考えられます。

大石内蔵助良雄像
（JR播州赤穂駅前）



大石内蔵助書状（正福寺蔵）
討入り前夜の12月13日に花岳寺、正福寺、神護寺宛に出した暇乞い状。

浅野内匠家来口上書（義士墨跡）
討入り後、熊本藩に預けられた大石以下の旧藩士10名の辞世、口上書などが残されている。市指定。



「大石内蔵助良雄切腹」長安雅山筆
『赤穂義士真観』のうち（赤穂市立歴史博物館蔵）

いま１つの大きな目的は、不公平な裁定を解消するということです。そのために、大石ら 46 人（足軽 寺坂吉右衛門が途中立ち退く）は吉良上野介を討ち果した後、幕府大目付に自首したのです。討入り後、もし大石ら全員が切腹して果てていれば、幕府はその処置に苦慮することはなかったでしょう。

大石らは「我々は幕府ができなかった喧嘩両成敗を自ら行った。これをどう処理する」と自らの命を幕府に差出したのでした。

幕府は、浅野内匠頭に対する即日切腹とは異なり、49 日間という日にちをかけての慎重な協議の後、46 人に切腹という決定を下しました。いっぽう吉良家に対しては、養子左兵衛を不届きとして、知行地召上げのうえ、流罪としたのです。

幕府に喧嘩両成敗させたことによって、ここに赤穂義士の復讐は完結しました。そして、それは一面には封建的忠義の行動の側面（亡君の仇討ち）を持ちますが、他方では巨大な権力悪に、何の力も持たない者達が自らの命を賭けて異議を申立てた反権力の行動でもあったのです。

「義士討入」長安雅山筆『赤穂義士真観』のうち
（赤穂市立歴史博物館蔵）

義士あんどん
赤穂事件をからくり時計で解説。

赤穂事件をたどる

忠臣蔵文化のひろがり

「仮名手本忠臣蔵十一段目　夜討人数ノ頭領　大星由良之助肖像」初代歌川国貞

忠臣蔵

この出来事は、身分の上下を問わず広く民衆の心を捉え、討入り直後には事件を窺わせる芝居が上演されるなどしました。そして討入りから 47 年後の寛延元（1748）年に、竹田出雲・三好松洛・並木千柳の 3 人によって人形浄瑠璃・歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」が完成したのです。

この作品は元禄の事件を太平記の世界にたくみに置き換え、全十一段に四季の移り変わりを取り入れ、多彩な舞台を作り上げています。

塩冶判官の無念の最期、忠臣による苦心の末の討入りを柱に、お軽・勘平の悲恋、足軽寺岡平右衛門の忠義、町人天川屋儀平の義侠心など数多くの見せ場を盛り込んでおり、赤穂事件を題材とした演劇の集大成と云っても過言ではありません。

以後、この事件をフィクションとして扱った作品は「忠臣蔵」と呼ばれ、後生に大きな影響を与えて現在に至っています。

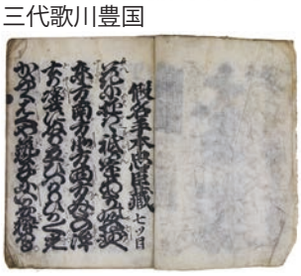
例えば、大序から十一段目まで全ての幕を落語で聴く事ができます。聴衆が「仮名手本忠臣蔵」の内容を諳(そら)んじていてこそ初めて擽(くすぐ)りが効くのです。また、芝居の場面やそれを演じる役者の錦絵は 4,000 種以上もの作品が確認されています。

「忠臣蔵」を題材とした文学・舞台・映画・ドラマなどは枚挙にいとまがありませんが、現代の特筆すべき舞台作品として、島田雅彦：脚本・三枝成彰：作曲 オペラ「忠臣蔵」、黛敏郎：作曲・モーリス・ベジャール：振付 バレエ「ザ・カブキ」があります。

大石ら赤穂義士の行為がいつの世にも民衆に支持されたからこそ、創作としての「忠臣蔵」が独蔘湯（起死回生の薬）として今日まで人気を保ち続けているのです。

「大星由良之助藤原良雄」
三代歌川豊国

「組合いろは建前」初代歌川豊国
市川団十郎の名がみえる。



浄瑠璃本「仮名手本忠臣蔵」
七段目「大盡の錆刀」の部分。

文楽人形「大星由良之助」

「義士仇討之図」初代歌川広重

※本ページの写真はすべて赤穂市立歴史博物館蔵

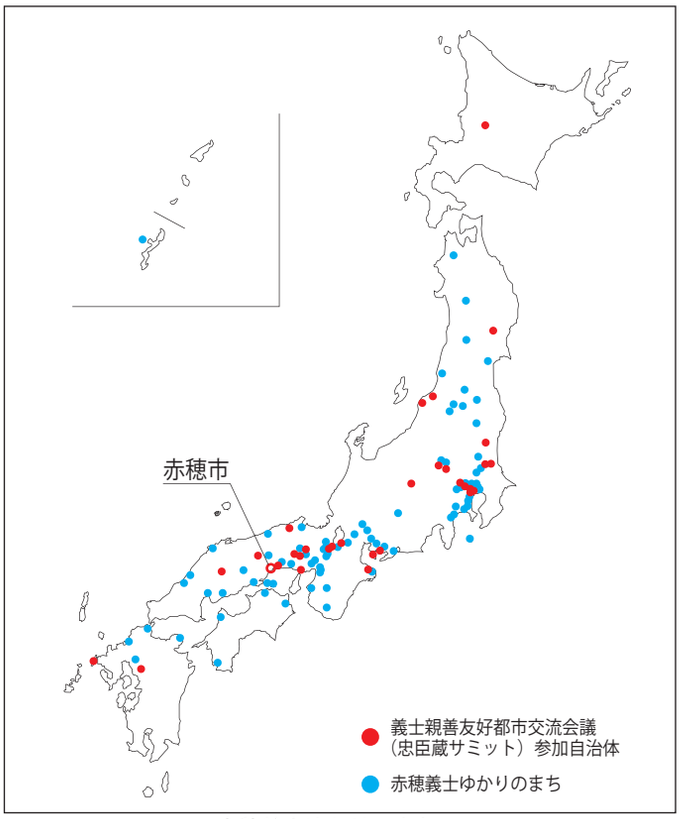
赤穂事件をたどる
つなぐ心

「仮名手本忠臣蔵　夜討人数ノ内　小寺千内肖像・佐藤与茂七肖像」初代歌川国貞

事件から 300 年も経過した「赤穂義士」が今も語り継がれているのは、当時の人々が称賛した、つまり共感したことの証であり、また「忠臣蔵文化」もしくは精神として人々の心の基層になったためでしょう。

事件後、江戸時代から近代にかけて各地で義士絵馬の奉納が行われ、崇敬を集めました。また近代になって赤穂城跡が民間に払い下げられるなか、花岳寺住職の仙珪和尚によって大石内蔵助良雄宅跡の土地が購入され、大正元（1912）年には赤穂義士らを祭神とする赤穂大石神社が建立されました。また市内各地では義士を祀る忠魂碑や大石内蔵助像などが数多く建てられているほか、義士の討入り日にあたる 12 月 14 日には市内最大のイベントとして赤穂義士祭が開催されています。

さらに忠臣蔵に見いだされた義士の心は全国各地に広がっており、ゆかりの地として 112 箇所が挙げられるほか、義士親善友好都市交流会議（義士サミット）が毎年開催されるなど、この事件を末永く記憶に留めるだけでなく、まちづくりに活用していく動きが広がっています。



赤穂義士ゆかりのまち

黒尾須賀神社義士画像図絵馬
嘉永２（1849）年に奉納された、市内最古の義士絵馬。絵師は京狩野派の菅原永得。市指定。

木生谷三宝荒神社義士画像図絵馬
幕末赤穂の絵師、長安周得の作で旧赤穂藩領内で唯一の江戸期の義士絵馬。市指定。

花岳寺　義士木像
義士33回忌の享保20（1735）年から製作を開始し、100回忌の享和2（1802）年に完成した。

赤穂大石神社
大正元（1912）年に創建。赤穂城内の大石内蔵助良雄宅跡にあり赤穂義士らを祭神とする。境内には宝物館のほか義士木像館、大石邸庭園などがある。

義士宅跡
城内や旧城下町20ヵ所に点在。それぞれ石標と解説板が設置されている。

大石良雄宅跡長屋門
赤穂藩浅野家家老の大石内蔵助良雄の屋敷は享保14（1729）年に焼失、長屋門のみが残された。

たくみさん
浅野長直によって開発された戸島新田にある光浄寺で、浅野長直の命日の8月24日に地域住民によって追慕が行われる。

赤穂義士祭
赤穂義士が討ち入りを果たした12月14日に行われる市内最大のイベント。明治36（1903）年から開始された伝統行事でもある。忠臣蔵パレードには大名行列、義士伝行列、山車、義士行列などが行われる。写真の大石内蔵助は西郷輝彦さん。

義士学習の取り組み

総合的な学習として地域の偉人を学習している。

忠臣蔵サミット
赤穂市の呼びかけで平成元（1989）年からはじまった義士親善友好都市交流会議（忠臣蔵サミット）。現在は全国32の自治体が加盟している。

子ども義士物語
赤穂市立城西小学校が「総合的な学習」の一環として行っている恒例行事。6年生児童が台本を作成し、手作りの演劇を行う。その成果を活かして現地観光案内も行う。

小学生の観光案内
赤穂市立塩屋小学校が赤穂の歴史に関する研究成果を現地で発表。

赤穂市立歴史博物館
赤穂義士をテーマの一つとして展示を行っている。

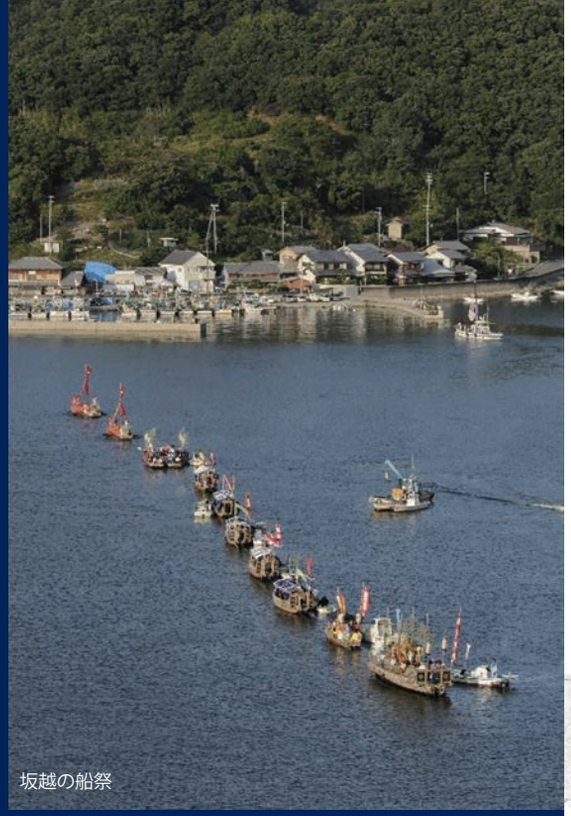
大石名残の松（二代目）
御崎を出立する大石内蔵助を顕彰する松が、後世に植えられた。

赤穂市立歴史博物館 館内展示

大石内蔵助良雄之像
御崎展望台広場にあり、京都山科に向け船で出立する際の姿を表している。

まつりといのり
―社寺周辺の風景―

赤穂八幡宮獅子舞の獅子頭


坂越の船祭

塩屋荒神社屋台行事

■ストーリー

古くから、人々の生活には信仰が深く結びついていました。市内には歴史ある数多くの社寺が残されており、多くの場合、その周囲の景観までも往時の雰囲気を伝えています。

また各地域の神社で行われる秋祭りは、赤穂の特性をよく反映し、船祭りや屋台など多種多様な神事が行われているほか、「播磨は獅子どころ」とよく言われるように、地域ごとに特色のある獅子舞が奉納されています。

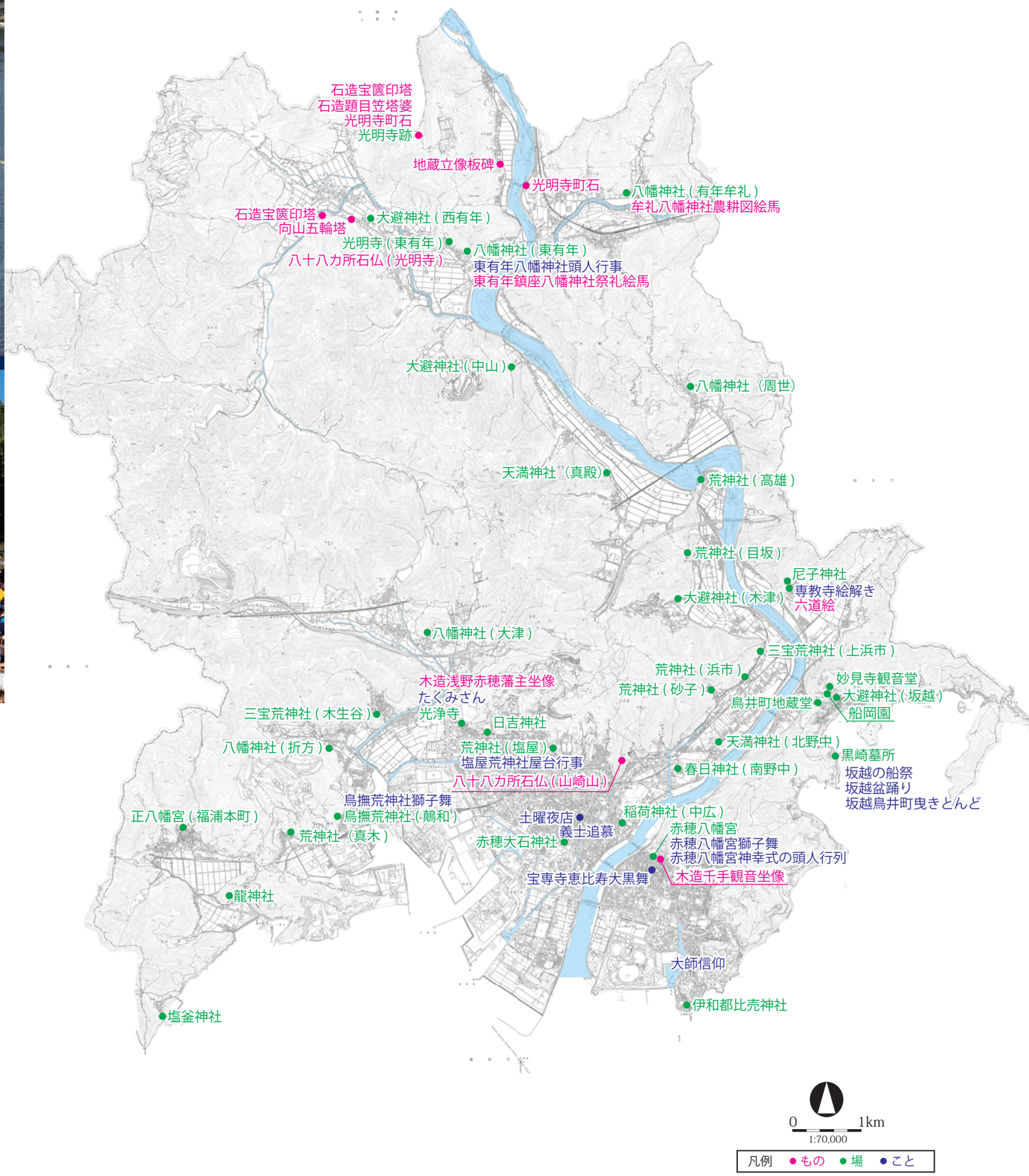
秋祭りは現在も地域全体の行事として行われており、地域コミュニティの維持・形成にも重要な役割を果たし、継承への努力が現在も行われています。

赤穂義士祭当日の花岳寺早朝参拝

獅子舞の伝承風景

木造千手観音坐像（普門寺）

■主な歴史文化遺産の分布



信仰－社寺の景観

　各地域で村が営まれるにあたって、各宗派の信仰拠点となった寺院、そして村全体の鎮守として、村を一望できるような場所に築かれた神社。
　赤穂市内にはこうした景観が今も変わらず残されているところが多く、ひっそりとたたずむその景観に歴史の重みを感じることができます。

大避神社（中山）の合祀神社
秦河勝を祀る大避神社の境内社。
周囲は樹木に囲まれ、荘厳な雰囲気を残す社。

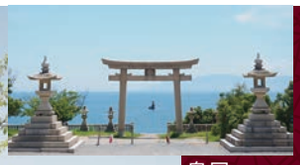
光明寺（東有年）
境内には八十八ヶ所石仏もあり、秋には素晴らしい景観を見せる。

山崎山からの眺望
山崎山の八十八ヶ所からは赤穂市街地（旧城下町）を望むことができる。

妙見寺観音堂（坂越）
宝珠山の山腹にある珍しい懸造建築。
市指定文化財。

八幡神社（周世）
林の参道を抜けて境内に入ると土俵があり、そこで秋祭りの獅子舞が奉納される。

伊和都比売神社（御崎）
瀬戸内海に面した市内唯一の式内社。海上交通の神社として、浅野長矩がこの地に移したという。



鳥居

祭りの風景

坂越の船祭（坂越）
大避神社から坂越湾に浮かぶ生島の御旅所まで船団が巡幸する。遠くの海上に浮かぶのは牡蠣養殖の筏。国指定文化財。

大避神社祭礼絵巻（個人蔵）
御旅所までの船団を描いた絵巻。弘化２（1845）年。

塩屋荒神社屋台行事（塩屋）
市内最大の屋台行事。東西２地区が屋台練りを競い合う。市指定文化財。

赤穂八幡宮獅子舞（尾崎）
かつては市南部全域が氏子であった八幡宮の獅子舞。鼻高が主体的な役割を担う。県指定文化財。

北に山地を、南に瀬戸内海を擁する赤穂市には、特徴ある様々な祭りが残されています。

天然の良港坂越湾を舞台に繰り広げられる瀬戸内三大船祭の一つ「坂越の船祭」では、11 艘もの船団を組んで御旅所のある生島への海上渡御が行われます。

江戸時代には千種川下流域の多くの地域が氏子域であった赤穂八幡宮で行われる獅子舞は、太鼓だけで鼻高・獅子による道中舞を繰り広げる伝統が残されています。

西浜塩田の浜男たちが集住した塩屋村で行われていた「塩屋荒神社屋台行事」は、東西 2 地区の大屋台が練りを競い合う市内最大の屋台行事です。市内屈指の芸獅子である鵤和の「鳥撫荒神社獅子舞」は梯子獅子が特徴です。

かつて近世山陽道の有年宿として栄えた東有年の「東有年八幡宮頭人行事」は、伝統的な頭人行事の古い風習が色濃く残ります。

こうした行事には「頭人」が多く関わっているのも特徴です。

東有年・八幡神社祭礼
頭人、神田、オハケ、トリノコなど、旧習をよく残す祭礼。市指定文化財。

祭りの華－鼻高と獅子

獅子舞は江戸時代に全国に広まった民俗芸能で、一般的には神輿の先導役、露払い役を果たすものです。

播磨は「獅子どころ」として有名で、その一角を担う赤穂でも市内 30 か所の神社で行われている秋祭りの代表的な行事となっています。

赤穂の獅子舞における中心的な存在は獅子と鼻高（天狗）であり、各神社によってその役割は微妙に異なっていますが、基本的に鼻高は獅子の先導役であり、また獅子と対決することによって獅子舞を盛り上げることに貢献しています。

伊和都比売神社獅子舞（御崎）
かがり火のなか奉納される本宮の獅子舞。赤穂八幡宮獅子舞の流れを汲むがより激しくアレンジされている。

赤穂の獅子舞は主に 3 つの系統に分かれています。

一つは赤穂八幡宮獅子舞に代表される鼻高が中心となるもの。基本的に演目は 1 種類しかなく、古相を残す赤穂八幡宮獅子舞（県指定文化財）では笛による囃子はなく太鼓のみによって舞われます。かつての赤穂八幡宮の氏子域にこの系統のものが見られます。

もう一つは獅子が中心となるもの。太鼓と笛の囃子にのって、様々な演目が披露されます。「おたやん」「ひょっとこ」「サル」「キツネ」「ぼんさん」など多彩な役割が登場するのも特徴です。

今一つは芸獅子です。肩車や梯子をつかった曲芸的な演目が特徴で、現在市内には鶏和と西有年に見られます。

神勇（カミイサミ・カミイサン）の舞

サル
子どもが演じるもので、獅子をからかうように舞う。

鳥撫荒神社獅子舞
市内随一の芸獅子で梯子獅子が最大の特徴。赤穂市指定文化財。

鼻高（天狗）
赤穂の獅子舞において重要な役割をもつ。主に獅子の先導役となる。

市内の秋祭り一覧

地区	場　所	開催日	中心行事	神輿	屋台	獅子舞	頭人行事	その他
赤穂	赤穂大石神社（上仮屋）	10月第3日曜日	神田の稲刈					浦安の舞
	稲荷神社（中広）	10月15日以降の日曜日	獅子舞奉納 頭人	○		◎	○	
	春日神社（南野中）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
城西	上仮屋獅子舞保存会	不定期	獅子舞奉納			◎		
塩屋	荒神社（塩屋）	10月25日直近の日曜日	**屋台行事** 獅子舞奉納		◎○	◎		
	日吉神社（新田）	10月25日直近の日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
	八幡神社（大津）	10月25日直近の日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
	三宝荒神社（木生谷）	10月25日直近の日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
西部	八幡神社（折方）	10月26日直近の日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
	鳥撫荒神社（鷏和）	10月第2日曜日	**獅子舞奉納**			◎		
	槇荒神社（鷏和真木）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎		
	正八幡宮（福浦本町）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎		
	龍神社（福浦新田） 塩釜神社（福浦古浜）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			中断		合同で祭礼実施
尾崎	赤穂八幡宮（尾崎）	10月15日以降の日曜日	**御旅所への頭人行列**	◎	◎○	◎	○	
御崎	伊和都比売神社（御崎）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○	◎○	◎		
坂越	大避神社（坂越）	10月第2日曜日	**御旅所への船渡御**	◎		◎○	◎	
	尼子神社（高野）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
	三宝荒神社（上浜市）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
	荒神社（浜市）	10月第2日曜日	子供神輿	○				
	荒神社（砂子）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○	○	◎○		
	天満宮（北野中）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○		中断		
高雄	大避神社（中山）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎		
	天満神社（真殿）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎		
	周世八幡神社（周世）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎		
	荒神社（高雄）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	中断		◎		
	荒神社（目坂）	10月第2日曜日	獅子舞奉納			◎○		
	大避神社（木津）	10月第2日曜日	獅子舞奉納	○		◎		
有年	大避神社（西有年）	10月第3日曜日	獅子舞奉納			◎		浦安の舞
	八幡神社（東有年）	10月第2日曜日	**御旅所への頭人行列**	◎	◎		○	流鏑馬・オハケ トリノコづくり
	八幡神社（有年牟礼）	11月第1日曜日	獅子舞奉納	○		◎		

※ ◎は成人が行うもの、○は子供が行うもの
　赤字のゴシックは指定文化財

船岡園（坂越）
大正 3（1914）年に整備された児島高徳顕彰の公園は海の見える桜の名所となっている。現在も周辺で桜の植樹が行われている。

光明寺奥の院
中世に山岳寺院であった光明寺は現在山麓に下りており、山上は奥の院として石造物等が整理されて中世的な風景が残されている。

今に伝わるこころ

秋祭り以外にも、様々な行事が赤穂市には残されています。生活が都市化した現在にあって「時代遅れ」の服を着て歌い、踊るのはなぜでしょうか。そこには、ふるさとの歴史文化への強い思いがあるからに違いありません。

近年は少子高齢化の危機を前にして、逆に地域づくりが活発化する事例が増えています。

正八幡宮獅子舞（福浦）
福浦西地区の雌獅子は、少子高齢化のため中断していたが、平成 29 年に 7 年ぶりに復活した。

塩屋屋台蔵
塩屋荒神社の秋の祭礼で用いられる屋台の蔵。東・西でそれぞれこのような蔵を持っている。

土曜夜店
昭和 2（1927）年の「一六夜店」からはじまり、90 年以上の歴史をもつ夏の風物詩。

坂越盆踊り
広場のなかった坂越地区では、盆踊りは道路上で 2 列になって行っていた。現在も保存会によって守られている。赤穂市指定文化財。

たくみさん
光浄寺では、戸島用水を引き、自らの村を拓いた浅野長直の命日に、地域住民が法要を行っている。

義士追慕

毎年 12 月 14 日に開催される赤穂義士祭は、平成 29(2017) 年で第 114 回を数える歴史ある伝統行事です。義士祭では街頭パレードなど華やかなイベントが開催されますが、その当日、浅野家の菩提寺である花岳寺等で義士追慕が行われています。

花岳寺　義士参拝

お大師信仰

御崎地区において古くからあるまちは瀬戸内海を臨む斜面地にあります。ここには 7 か所の大師堂があり、弘法大師信仰が今も残っています。

個人宅内にも祀られているものがあり、その信仰の厚さと歴史を感じることができます。

お大師まいり

市内に残る年中行事

赤穂市では昭和 58（1983）年から民俗調査を行っており、その成果は『赤穂の民俗』全 11 巻として刊行されています。

本基本構想の策定にあわせ平成 29 年市内全自治会 96 地区へのアンケートを実施したところ下記のような成果が得られました。

大黒舞やとんど、輪越といった伝統行事が残るほか、義士追慕といった赤穂独特の行事も見られますが、「やいとぞめ」や「井戸浚え（5 月）」といった行事は記憶に残るのみとなるなど、残念ながら多くの年中行事が見られなくなっています。

	1月																		2月													3月	4月													5月									6月	
	四方拝	若水	雑煮	初詣	大黒舞	初山	落葉かき	七草粥	山神さんの祭り	十日戎	お棚下ろし	とんど	ぜんざい	お大師講	義士追慕会	ひとえ正月	荒神講	初午	二の午	やいとぞめ	節分・豆まき	赤いわし	針供養	涅槃さん	お大師詣で	新年祭	絵説き	雛祭り	花見	恵比寿神社祭り	灌仏祭	甘茶接待	春祭り	観音祭り	お大師祭り	井戸浚え	絵説き	ご誕会	端午の節句	鯉のぼり	武者人形	菖蒲湯	ウオジマ	大漁祈願	蛍狩り	輪越（大祓）
赤穂地区		○	○	○	△	○		○		○		○	○	○	○			○	○		○	○	△	○			△	○	○	△	○	○	○	△	△	△		○	○	○	○	○	△		△	○
城西地区	△	△	○	○	△	○		○		○		○	○	△	○			○	△	△	○	○	○		○			○	○			○	○		△	△		○	○	○	○	△		○	○
塩屋地区	○	△	○	○	△	○		○	○			○	○					○			○		○			○		○	○		○	○		○	○	△		○	○	○	○				△	○
西部地区			○	○		○	△	○				○	○								○		△					○	○	△			○	○				○	○	○	○	○	○	△	△	○
尾崎地区	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	△	○			○			○	○	○					○	○			○	○			△		○	○	○	○	○	○		○	○
御崎地区			○	○		○		○				○			○						○							○	○						○				○	△	△	△				○
坂越地区			○	○		○		○		○		○	○	△			○	○			○				○	○		○	○	○		○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○				○
高雄地区			○	○				○				○	○								○	○	△					○			○	○						○	○	○	○	○			△	○
有年地区	○	△	○	○		△	△	○			○	○	○			○		○			○	○	○					○	○		△	△	○			△			○	○	○	○				○	

	7月							8月											9月		10月		11月			12月												
	虫干し	土用	丑湯	天神祭	盆踊り	夏祭り	足洗い	七夕	七夕迎え	七夕流し	提灯行列	井戸浚え	施餓鬼会	盆踊り	精霊流し	盂蘭盆会	地蔵盆	八朔	月見	彼岸の中日	秋祭り	鈴の緒づくり	ふれあいまつり	報恩講	ふれあいまつり	新嘗祭	義士追慕・参拝	餅搗き	正月準備	鏡餅	モチ花	しめ飾り	門松	羽子板飾り	船飾り	大晦日	お節料理
赤穂地区	○	○	○	○	○	○		○		△	△		○	○	△	○	○		○	○	○			○	○		○	○	○	○	△	○	○	○	△	○	○
城西地区	○	○	△	○				○	○	○			△	○	△		○		○	○	○			○			○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
塩屋地区		○		○			△	○	△	△		△	○	○	○	○	○		△	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
西部地区	△	○				○		○	△	△	△	△		○	△	○	○			○	○			○				○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
尾崎地区	○	○		○				○	○	○	△	△		○	○	○	○			○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
御崎地区	○	○				○		○					○	○		○				○	○			○				○	○	○	○	○	○	○		○	○
坂越地区	○	○		○		○		○	△	△		○		○		○	○		○	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高雄地区	○	○					○			○				○		○	○		△	○	○			○				○	○	○	○	○	○	○		○	○
有年地区	○	○	○			○		○	△	△			○	○		○	○		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	△		○	○

凡例　（組織・家庭で）　○ 現在行っている　△ かつて行っていた　詳細な結果は第 7 章に記載。

赤穂市では、生活スタイルの都市化によって、かなりの年中行事が失われていることがわかりました。

昭和 50 年代の調査記録をもとに、今後は現在に残された年中行事が衰退せず、復興の気運も高まっていくよう、地域ごとに取り組んでいくことが望まれます。

なお、坂越地区の「鳥井町曳とんど」や「宝専寺恵比寿大黒舞」などは、こうした復興を遂げた良好な事例として挙げることができます。

坂越鳥井町曳きとんど
とんどを海岸まで引っ張り、燃やす伝統行事。平成 26（2014）年に 29 年ぶりに復活した。

宝専寺恵比寿大黒舞
かつては正月頃に各戸を回る風習があった。一度消滅したが昭和 41（1966）年から復活、現在は子どもへの継承事業も行う。兵庫県指定文化財。

海の遺跡、山の遺跡

―埋蔵文化財の宝庫―

みかんのへた山古墳と鍋島古墳（撮影：出水伯明）

蟻無山古墳群

赤穂市は、山に囲まれた北部と、瀬戸内海に面した南部とに大きく分かれ、それぞれに古墳が分布します。

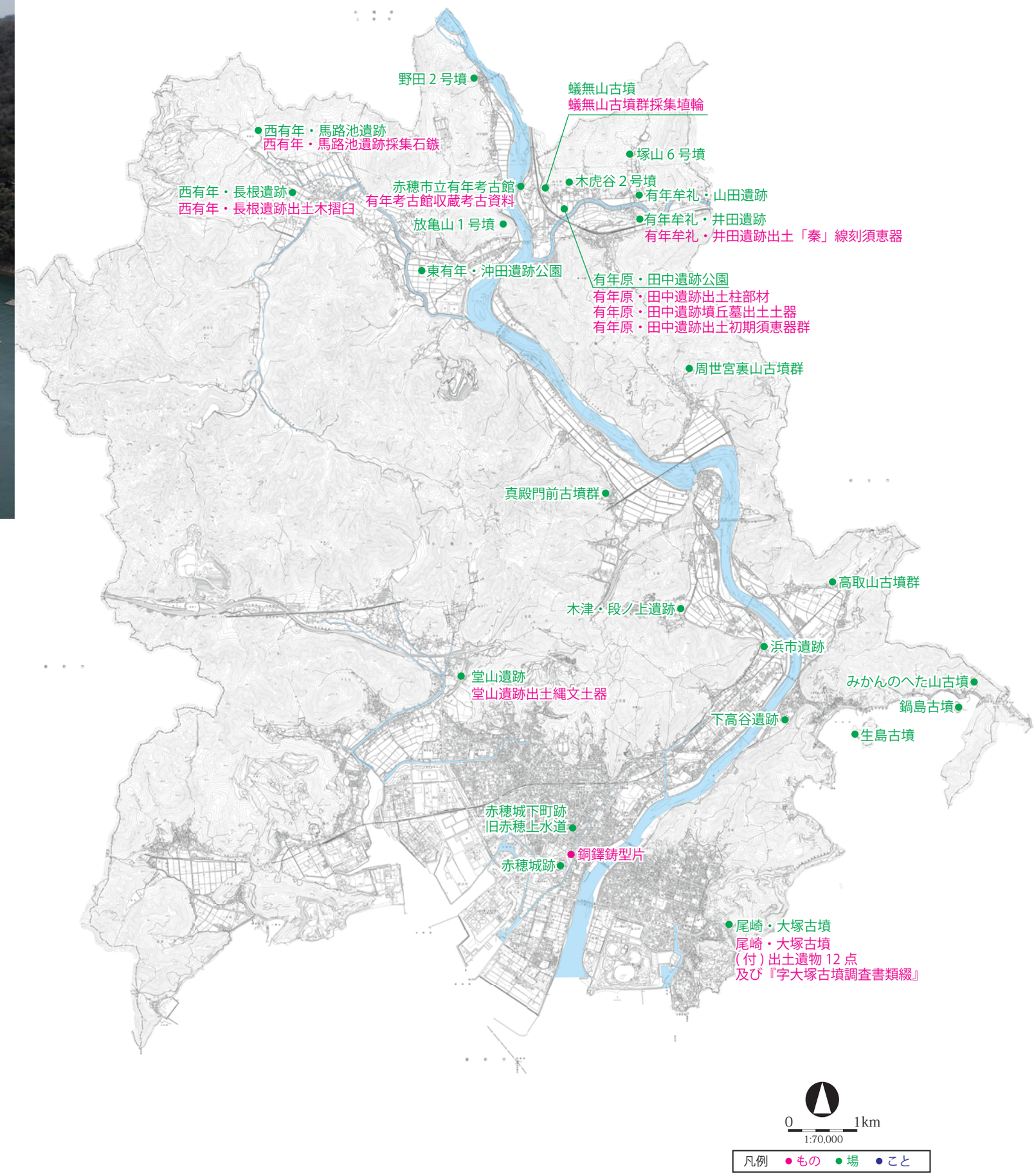
こうした古墳のほとんどは、発掘調査が行われていないため詳細はわかりませんが、海に面して立地する古墳は、人々を養うだけの平野が存在しないことから、漁業集団のなかの有力者の墓ではないかと推定されています。一方、北部の古墳については十分に広い平野があり、農耕を生業として生活を営んでいた人々が生み出したものと考えられれています。

赤穂市には南北それぞれに独特の人々の生活があり、遺跡や古墳もこれらを反映しているのです。

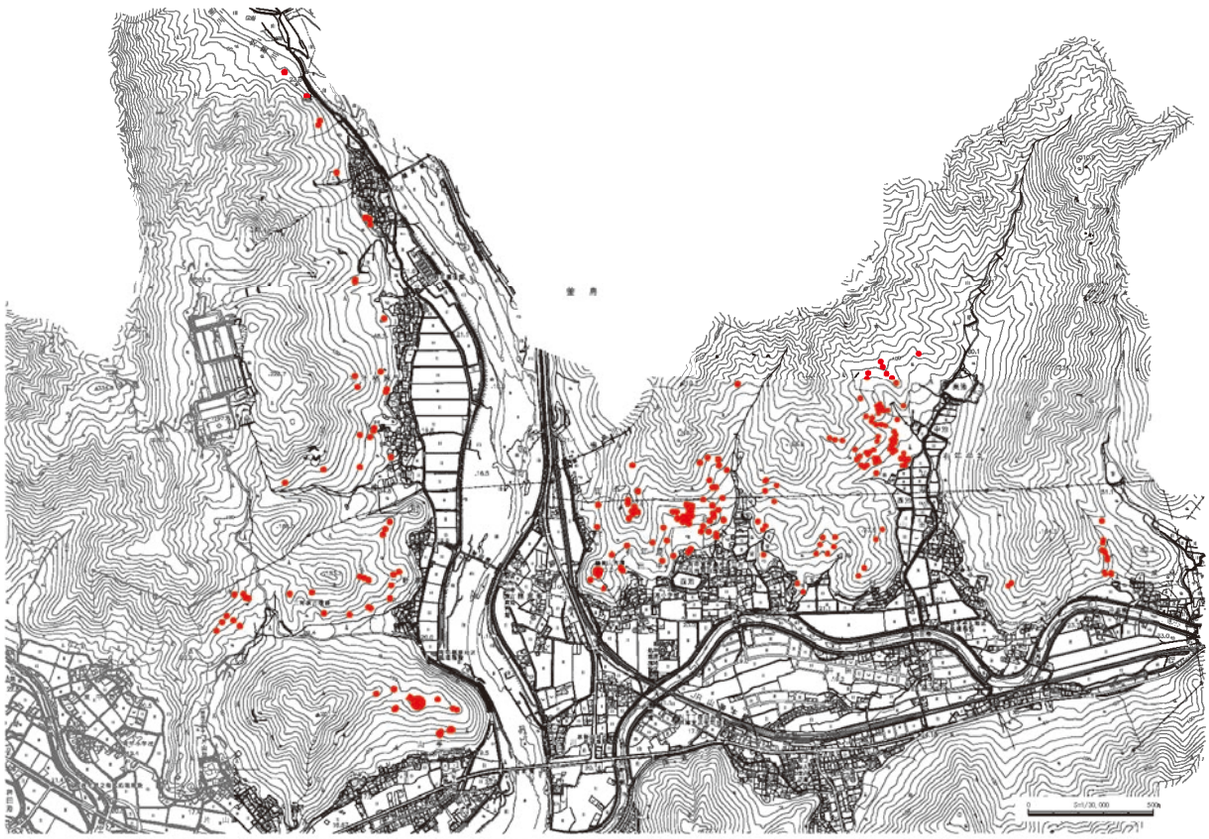
尾崎・大塚古墳

赤穂城跡

■主な歴史文化遺産の分布



有年地区の遺跡・古墳



有年地区東部の古墳分布　　平成25(2013)年度以降の分布調査によって明らかになった。総数219基を数える。

有年地区は「文化財の宝庫」と呼ばれるほど古代の遺跡が密集している地区であり、古くは縄文時代早期（10,000年前）から人々が生活を営んでいたことが判明しています。

遺跡数が特に増加するのが弥生時代（約2,300年前）からであり、有年地区全体に遺跡が見つかっています。このほか古墳時代後期になると、特に有年地区東部において数多くの古墳が築かれます。その総数は219基。西播磨でも代表的な古墳群である塚山古墳群には55基の古墳が密集し、「間仕切り」という特殊な構造を持つ横穴式石室が多くみられ、学術的にも注目されています。

有年原・田中遺跡
１号墳丘墓出土装飾土器

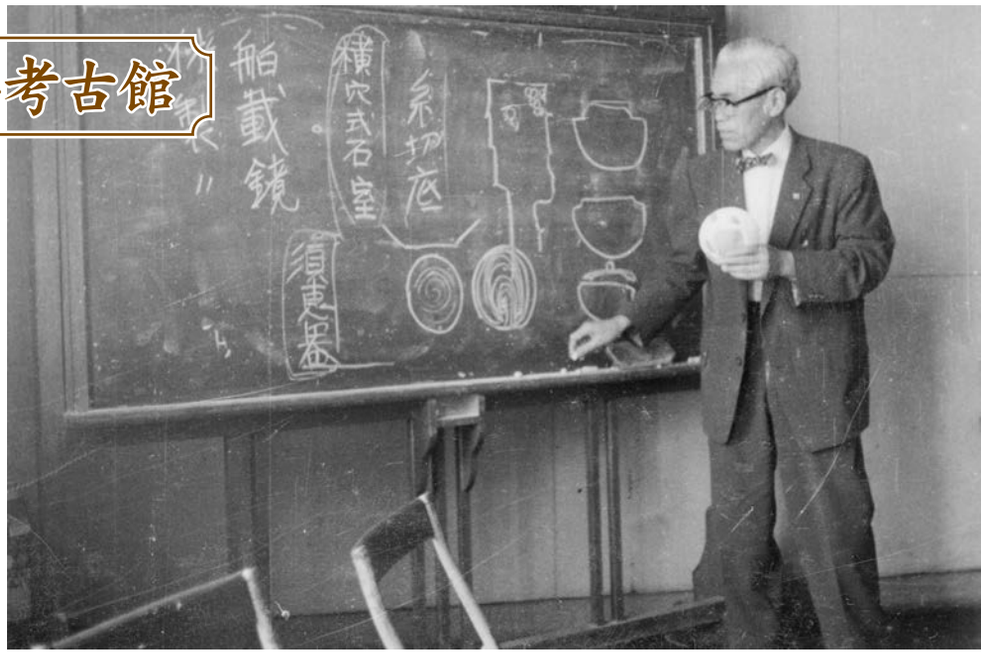
有年牟礼・山田遺跡　１号方形周溝墓

塚山6号墳のオルソ（正投影）画像

有年原・田中遺跡出土
初期須恵器・陶質土器

有年牟礼・山田遺跡出土
「秦」線刻須恵器

松岡秀夫と有年考古館



現在の赤穂市有年楢原に、兄の遺志を継いで眼科病院を構えた松岡秀夫。戦後、土地開発で失われていく遺跡を目の当たりにし、遺跡の保護と考古資料の収集を思い立ったのは43歳の時でした。

昭和25（1950）年には有年考古館を設立。「日本一小さい考古館」と異名をとりながらも、銅剣や三角縁神獣鏡をはじめとする貴重な考古資料が多く収蔵され、赤穂市、相生市、上郡町の古代史は有年考古館資料によって語られたといったも過言ではありません。

地域住民に文化財の価値を説く松岡秀夫
地域住民を自宅に集めては講義を行っていた。

有年の史蹟を守る会の活動
地域住民の約25％が会員となっていた。

また松岡は、地元住民とともに遺跡の保存運動を盛り上げ、多くの古墳を残しました。現在、有年が「文化財の宝庫」と呼ばれるのも、そのおかげと言えるでしょう。

有年考古館は、開館後60年を経て赤穂市に寄贈され、平成23年11月からは赤穂市立有年考古館として再出発しました。赤穂市では、当時の志を残したまま、有年地区の歴史文化をより楽しんで学習できる場に整備しています。

赤穂市立有年考古館内の常設展示

開館当時の有年考古館

現在の赤穂市立有年考古館

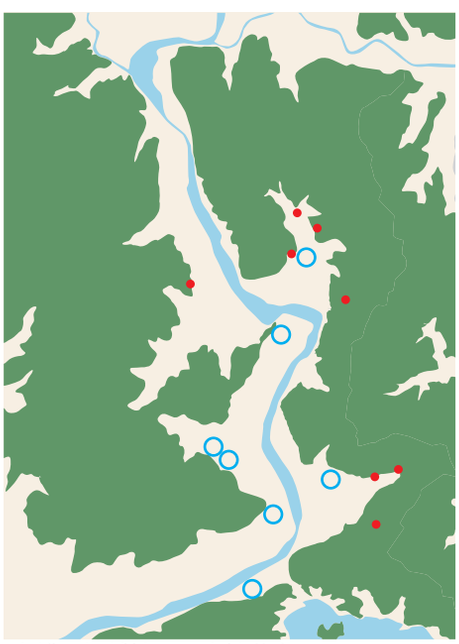
高雄・坂越地区の遺跡・古墳

坂越湾周辺の古墳分布　平野のない坂越にある古墳は、漁業を生業とした集団の墓と考えられている。（撮影：出水伯明）

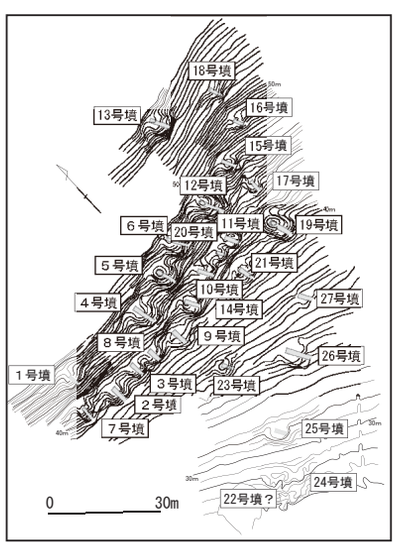
千種川は山に囲まれた狭い範囲を流れているため、大雨が降るとたびたび洪水が起き、大きな被害を与えていました。そのため古代のムラは千種川の洪水から免れることのできる土地に営まれるのが一般的でした。特に古墳は平野のムラから少し離れた山側に築かれることが多く、高雄地区では古代集落遺跡に隣接した山麓などで見つかっています。いずれも少し高いところにあり、当時の墓に対する考え方を推し量ることができます。

一方、坂越湾周辺では、今のところ古代集落遺跡がほとんど見つかっていませんが、大規模な古墳が島や山上に築かれています。有年地区や高雄地区のようなムラができる平野がないことから、これらの墓は漁業を生業とした集団の墓であると考えられています。

なお大避神社の神地である生島内の生島古墳は伝秦河勝墓として現在も神聖な場所とされています。



高雄～坂越地区の古墳分布
●古墳　○集落遺跡
千種川の影響を受けにくい場所に集落遺跡が立地している。



周世宮裏山古墳群
非常に小規模な横穴式石室が密集する古墳群。無袖式のものがほとんどである。

周世宮裏山古墳群

塩屋・西部地区の遺跡・古墳

塩屋・西部地区は近世頃に開発された土地が多く、残念ながら遺跡に恵まれていません。しかし大津の堂山遺跡では、縄文時代前期（約6,000年前）から晩期までの多数の縄文土器をはじめ、古墳時代以降の製塩土器が見つかっており、今後の調査が期待される地域です。また堂山遺跡では円筒埴輪片も出土しており、周囲に古墳の存在が推定されています。

弥生時代になると、高山で土器や石器が採集されています。その詳細はよくわかっていませんが、非常に眺望の良い土地に住居を構えていた時代があったのかもしれません。またこの山麓部は古代に「石塩生荘」として東大寺の荘園が置かれた場所であり、山々は塩山として燃料調達に用いられました。

古墳としては折方の天神山古墳があり、坂越と同様、海に面して築かれていました。

堂山遺跡出土縄文土器
縄文時代前期から晩期まで続く
珍しい遺跡である。

尾崎・御崎地区の遺跡・古墳

尾崎・御崎地区は塩田のまちであり、中近世をさかのぼる歴史があるわけではありません。しかし塩田が築かれる前の縄文時代には、すでに人々が生活を営んでいた痕跡があります。

猪壷谷遺跡では、縄文時代後期の土器や石器が多数出土しています。縄文時代後期は、全国的にも見つかる遺跡数が増加する時期であり、海をわたって入植したのでしょうか。謎は尽きません。

もう一つ、瀬戸内海を臨む山上に尾崎・大塚古墳があります。6世紀後半から7世紀前半の後期古墳には両袖式の横穴式石室が築かれており、市内でも大型の部類に入ります。当時は周囲に水田をつくる場所もなかったことから、漁業に関連する生業のムラがあったのかもしれません。

尾崎・大塚古墳

尾崎・大塚古墳出土土器

赤穂城跡の発掘調査

国史跡赤穂城跡も遺跡の一つです。現在の赤穂城跡の前身である池田時代の城（掻上城）や、その前に築かれていた加里屋古城など、まだまだ謎が多く残されており、発掘調査によって今後明らかになることでしょう。

また赤穂城跡では発掘調査の成果を活かし、赤穂市のシンボルとなる史跡として、継続的な整備が行われています。

国史跡　赤穂城跡　　赤穂市のシンボルとして継続的に整備が行われている。（撮影：出水伯明）

二之丸門跡
山鹿素行が縄張りを変更した二之丸門枡形の基礎石が発見された。

三之丸大手門枡形
赤穂城の玄関口。改変される前の石垣や旧上水道が見つかった。

三之丸清水門跡
現在の市立歴史博物館に隣接する門跡。

本丸跡の発掘調査
御殿跡の発掘調査。右奥には本丸門が整備された。

二之丸城壁でみつかった埋没石垣
現在の赤穂城の前に築かれた遺構と考えられている。

赤穂城下町跡の発掘調査

発掘された町家跡
町家の玄関部分を発掘すると、敷地境界や間取り境界の石列が良好に見つかる。

出土した陶磁器類
赤穂城下町は当初の標高が1.0mと低く造成が繰り返されたため、造成土内に多くの陶磁器類が見つかる。

赤穂城下町跡は、平成10年度から本格的な調査が始まり、予想以上に遺跡が残されていることがわかってきました。約400年前の標高は約1.0mであり、現在の約2.0mまで造成が繰り返された結果、町家の基礎構造がよく残されたためと考えられています。また地下水の影響で一般には腐ってしまう木簡などの木製品がよく残されていることも特徴の一つであり、今後の発掘調査によって赤穂の歴史を豊かに物語る可能性をもっている遺跡と言えます。

発掘された木簡
赤穂城下町跡では地下水によって腐食から守られた木簡がよく出土する。武士や町人の名前が記されていることも多い。

旧赤穂上水道の発掘調査

旧赤穂上水道は、元和2（1616）年の切山隧道掘削完了によって敷設された水道で、「各戸給水」を成し遂げたことで日本三大水道の一つとされています。赤穂城下町跡の発掘調査を行うと、必ずと言ってよいほど見つかるこの遺構は、赤穂ならではのものと言えます。

発掘調査では、道路側から屋敷内に水を引き込むための給水管（竹、瓦、土、陶器製）のほか、会所（木製桶、箱枡）や汲出枡（木製、陶器製）などが数多く見つかり、その変遷も徐々にではありますが明らかになってきています。

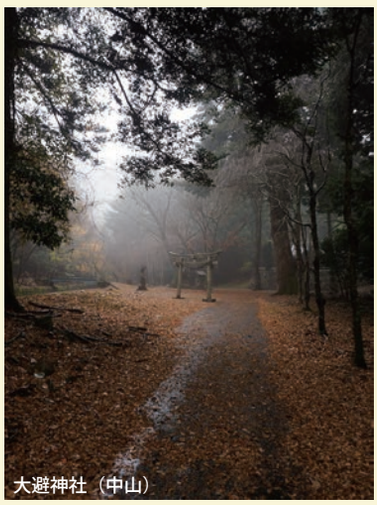
また、上水道が屋内に引かれる場所は決まって建物の入口（トオリニワ）部分であるため、発掘で見つかった建物遺構の入口を特定する重要な根拠にもなっています。

赤穂市ではこれらの発掘調査を実施しているほか、市街地の各所にモニュメントを設置し、その顕彰に努めています。

コラム
赤穂市の風景

赤穂市は、山、川、海の豊かな自然環境に囲まれた風光明媚なまちで、昔ながらの景観もよく残されています。ここでは、そのいくつかをご紹介します。

御崎の桜

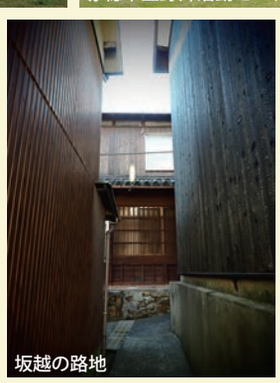

大避神社（中山）

旧坂越浦会所

瀬戸内海

赤穂市立野外活動センター

有年原・田中遺跡公園


坂越の路地

旧赤穂上水道導水路

周世地区の新幹線

八幡神社（周世）参道